

## 第6章

ビスマルクの時代と1914年までの帝国  
におけるディアコニーと内国伝道

## 1

ビスマルク時代、ヴィヘルン辞任後の中央委員会 - 規則改正  
社会主義者鎮圧法と社会改革 - 福音伝道運動 - 移民の困窮

ヴィヘルンは重い病気になりやむをえずハンブルクに帰った。それゆえ中央委員会は新しい指導者を選ばなければならなかった。ヴィヘルンから受け継いだ財産を誠実に守り、増やし、とりわけ新しい時代に合わせる事が大事だ、ということは皆の一致した意見だった。ドイツにおける、内国伝道とディアコニーの幅広い活動のすべてを一つにまとめることは容易ではなかった。活動分野が変化していくすべては、この中心的な役割を忠実にうつしだしていた。この中央委員会の歴史は、内国伝道とその事業が国民全体の中で、教会の内部で、第1次世界大戦が突発する1914年まで選んだ幅広い道を濃縮した形でつくり出した。

辞任したヴィヘルンにかわって、白髪の名誉会長ベトマン・ホルヴェクが1877年7月14日に亡くなるまで、中央委員会を指導することになった。1877年からほぼ10年間は暫定的な解決に努力した。1886年、ベルリン大学神学部で新約聖書の講座をもっていたD. ベルンハルト・ヴァイス教授が新しい委員長になった。偉大で天才的な人物が委員長の座に着く時代は過ぎていた。[1]

いまは、中央委員会の中に神学者が圧倒的に多いことが、適切な発展をさまたげていた。ヴィヘルンの時に、ヴィヘルン自身を神学者の中に数えると、神学者でない人が12人、神学者が13人と相対していた。それが1890年には、28人の神学者がいて信徒は15人だけであった。牧師と牧師候補者は共同責任を負う信徒の中にほとんどいなかっ

たのである。ベルリンのいくつかの省の高級官吏は、当局の先端で、もはや指導力を失っているのに自由な地位を占めていた。

実施された規約変更は重大なことであった。古い目標:「霊的・肉体的な困窮からの福音による国民救済」は、単調な決り文句に替えられた。中央委員会は、「福音主義のドイツ内部で、また外国で生活しているドイツ人のもとで、内国伝道の奉仕を通して神の国建設に尽力するという目標と課題」をもった。

フリードナーの救護思想が生彩のない目標に変わってしまったカイザースヴェルトで同じ事が起こった。[1\*] 冷静な第2世代は、福音伝道の力によって全国民が生まれ変わるという熱狂的な期待とは決別すると言った。内国伝道は、教会の命があらわれているとは思われなくなった。

教会が自覚を強く持つようになると、中央委員会は、「特に福音伝道活動を避けている国民生活の領域で、キリスト教慈善事業を活発にし、個々にしている努力を互いに結びつけ、助言と行為をもって彼らに仕え、活動を再開するように特別な努力をしよう」と呼びかけた。[2]

福音伝道は活発に熱心に行われ、「活動は極力他のものに頼らなかった」。また、引き締めようとする試みも、「すべての慈善事業を集中的に管理下に置くこと」も彼らは好まなかった。内国伝道の個々の領邦連盟とその地方の委員会とは、どうしても親しくなれず、独自に行おうとした。人はヴィヘルンから遠くはなれてしまったことを不安に思うようになった。

同じ時に、カトリック教会は、明らかに反対の道を行った。彼らは文化闘争の経験をもとに、まず報道組織を強化し、厳格な中央の指導をやめなかった。彼らは1865年に20の新聞だけがあった。それが1878年には271になっていた。彼らはカトリックの人々を、始めたばかりの会の活動の中に一人もれなくしっかりとつなぎとめた。彼らの総会であるカトリック大会はすばらしい展示をするようになり、承認されたスローガンを打ち出した。そこで領邦教会の弱さをいたわって、慎重に「提案」されただけではない。「慈善の社会福祉中央連盟」、強力な「カトリック・ドイツ国民会議」「カトリック婦人連盟」の3つと、1897

年以来の「ドイツ・カトリック・カリタス連盟」は一つの親密な事業体に合併した。また、それぞれの階級の人たちはみな、その従業員になり、職能組合に入るようになった。[2\*]

領邦教会とその牧師たちの内部で、内国伝道に対する姿勢にある種の変化がはっきりあらわれるようになった。子ども礼拝と少年労働は、はじめは内国伝道の地域共同体で働く牧師たちが協力しないで、単独で行われていたが、それは徐々に変わっていった。例えば聖書の時間のように、内国伝道がボランティアによってはじめたことは、今は共同体牧師たちが再開している。

個々のディアコニー職、もしくは教区監督が担当する地域共同体において、牧師は、徐々に内国伝道の課題をになう専門担当者になっていった。内国伝道は国民的なものとなった。人は、教会民の中で、特に非常の時に変わりうるということを知った。

中央委員会の人たちが教会当局者たちを無理に引っぱっていかなかったことは高く評価される。彼らがメンバーに入れたアドルフ・シュテッカーのような闘う人たち、またフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクのような窮屈な勧告者たちは、どんな時にも誠実であり、例えばベルリンのプロイセン教会総会のような統治と王座の洪面の前では、そんなによく働いたり謙虚にふるまったりはしなかった。

中央委員会は特別なストレスをがまんしなければならなかった。中央委員会の経営は、ヴィヘルンの親しい協力者で報道の才能に優れたユダヤ人の血統をもつフリードリヒ・ザロモ・オルデンベルク牧師が行っていた。彼は編集責任者として、かつてヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンが魅力的に編集した『フリーゲンデンプレッター』を出版した。彼はとても不安そうに、古くから変わらない内国伝道の活動路線を守り、彼が理解したヴィヘルン好みの思想の支持者であり、それ以外のことを望まなかった。変っていく委員会の良心は、社会問題においてはボーデルシュヴィンクやシュテッカーのような他の人たちのものになった。

そこでかつてヴィヘルンが始め、ほとぼしり出る刺激をもって受け取られた『フリーゲンデンプレッター』は活気に満ちたものになり、中

中央委員会の正式の機関誌になった。そうこうするうちに、1876年以來、「ディアコニーと内国伝道の月刊誌」に新しく効果的な専門機関誌が生まれた。ヴィルヘルム・レーエの重要な提案を受け入れた、アルトナー・ディアコニー施設長テーオドーア・シェーファー牧師は内国伝道の内部でルター告白教会の方向をより重要なものと認めさせようとした。[3] シェーファーは内国伝道を次のように規定した。「それは慈善事業を、まさに福音の自由な告知と同じように、教会の生命に植えつけ効果あるものにし教会の内的状態をよいものにしていく、19世紀の教会の改革運動そのものである。」[4]

この新ルター派は、人を回心させようとするだけで危険に陥ると安全であろうとし、大事な時に肝心なことに触れず些細なことばかり話した。ある種の不安気で反動的な動きは、そのことと結びついていた。外的には非常につつしみ深くみえるルター教会の内的なすばらしさが目ざす高い目標は、実際に達成できなかった。[5] だがこの危険は脅威となった！

中央委員会は、ルター教会のグループがしっかり守り、オルデンベルクの不用意な表明によって生じた懸念を取り除くことができた。ヴィヘルンが成功しなかったことがいま始まった。1875年10月のはじめ、ドレスデンルター領邦教会は内国伝道会議を開催することができた。これまで中央委員会の集会と一緒にしてきた教会大会はその間休会になった。カトリック教会はそれをドイツの中に力強くまた印象深く拡充したが、プロテスタント教会は教会大会を眠りにつかせた。そこで教会大会なしの中央委員会大会が、ドレスデンで初めて開催された。その時出席者は60%を下まわった。ハレでは1872年最後の教会大会で約1,200人の出席者があり、ドレスデンではかろうじて500人が出席した。だが、この損失はやがて取りかえされた。とりわけ、主題講演と特別会議が区別され、自由な夕べの催しを広く世間に呼びかけ、それは非常によいものになった。

困難な実務的作業は、それが福音主義の全ドイツを揺り動かした多くの実践的、教会的課題を、ヴィヘルンの意味で、中央委員会の努力の中心に置いた。ドイツ・プロテスタント教会の中で連帯しようとする

る機運は、教会連合がなかった時にすべての領邦教会の境界を超えて生まれ、実質的なものになった。

社会問題は、思ったよりはやく、労働者階級の視点から再び焦点となった。1878年5月11日、板金職人の親方ヘーデルが、華やかな大通り「ウンター・デン・リンデン」で白髪の皇帝ヴィルヘルム4世を暗殺しようとした。ピストルの弾は目的を達成しなかったが、世間は非常に興奮した。ビスマルクはこの件を、彼が長い間準備し、事務機の引き出しからとりだしさえすればよいだけにしていた法案を帝国議会の審議にかける機会に利用した。それによって社会民主主義の宣伝は壊滅的な打撃を受けるようになった。それでも帝国議会の自由主義者の多数は法案を認めなかった。だが、1878年6月2日、無政府主義者ノビリング博士は老いた皇帝を射ぬき、考えられない年月、重大な負傷を負わせた。その時「鉄の宰相」が登場した。

わずらわしい帝国議会はあっという間に解散された。保守の多数派となった新しい帝国議会は、1878年10月21日社会主義者鎮圧法を可決した。「社会民主主義、社会主義、または共産主義が、既成の国家と社会秩序を転覆しようとする」すべての会は禁止された。集会禁止が続き、印刷物の配布と分担金の徴収は禁止された。この法律は採決を3回延長し、1890年まで保持された。

ビスマルクは、主にカトリック教会に反対して文化闘争を導入したが、それは教会を強くし、力をつけさせただけとなり、ここでも同様に、まったく過ちをおかした。社会主義者鎮圧法は非常に大きな損害をもたらした。1890年まで、法律によって322の新聞を禁止し、900人を国外退去にし、1,500人を有罪にした。このことは、いったい何を意味したのか？こうした弾圧は、むしろ労働者大衆を扇動する指導者たちを集め、彼らをいっそう親密に結びつけただけのことである。今まで組織された労働者階級の多くはまだカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスが言う意味で完全に結束していたのではない。彼らはむしろブルジョワ階級の左翼自由主義者との関係を、とりわけ南ドイツと西ドイツで得ようとしていた。[6]

しかしながらベーベルの著書『女性と社会主義』は、社会主義者鎮

圧法のおかげで強い影響力を持つようになった。それはひそかに印刷され、配布された。それはプロレタリアートのメシア的使命感をよみがえらせ、彼らにすばらしい将来を約束した。しかし、キリスト教に敵意をいだいているこの本の中で、ドイツの少女労働者と女性労働者の状況についてなされているありのままの報告は、さらに強い感銘を与えた。ここに集められたものは、とてもひどいものであった。しかし、ベーベルは高い身分の人の罪も同じように負い、この報告に真実のしるしをあらわしている。また公共生活の中にある汚れと低俗に対する彼らの誠実な闘いにも、ベーベルは大いに共感を示したにちがいない。[7]

だがオルデンベルクは、『フリーゲンデンブレッター』で何を報じようとしたのか？彼は、社会主義者鎮圧法が直接間接によいものだというすべての意見を明らかにした。彼は政府に隷属する人たちの態度にひっばられて、『フリーゲンデンブレッター』が実際には社会民主主義に反対する闘いの新聞になっていくことを認めた。オルデンベルクは、内国伝道の各協会に「社会民主主義と闘う会」があるのを目にしていたヴェストファーレンの牧師ハルベの命題を受継いだ。(1875)[8]

だが中央委員会は、1877年の時点でそんなにはっきりしていたわけではなかった。「私たちは社会民主主義者に対しては暖かい友であるが、社会民主主義者に対しては確固たる反対者である」。しかし、中央委員会の中では、実際には、少なくとも緊急の労働者問題や簡易宿泊所の要求、オランダを往来する人や鉄道労働者のような労働者階層の特別なグループになされる教会の奉仕は制限された。その点での「労働者問題に関する」彼らの貢献は、あったのである。

1880年以來の社会主義者鎮圧法と親ゆび締め拷問の時代のただなかで、同じ種類の施設、あるいは自由協会の連合を意味する専門分野の連合が次第になされた。活発な交流、相互の提案と計画が共通の業務のなかで始まった。この労働分野、専門分野、そして活動分野にしたがって構成されたものは、続く10年の経過の中で、多くの変遷をたどった。しかも、それらは強固になり、また同時に「中央委員会の中に活きた統合を保ち続け、互いに緊密な結びつきをもつ繊細な生命組

織」を保った。[9]

確かに、社会主義者鎮圧法がある以上中央委員会の状況は容易ではなかった。中央委員会は日曜日休日をあきらめずに主張したが、つまらない拒絶を何度も甘受しなければならなかった。プロイセンの通産大臣アッセンバッハは、例えば、日曜日を休みとするために、また鉄道の物流を日曜と祝日には減少させる陳情を、1876年に拒絶した。それと同時に、営業法を変更するために、手工業主と工業主が「徒弟期間修了者、職人、徒弟、また労働者を日曜日と祝日に働かせてはならない」という請願(1877年)に、約3万2千人の署名をつけて、帝国宰相と連邦参議員に提出された。しかし帝国議会は1878年にわずかに青少年の日曜労働を禁止するところに達しただけであった。

ライン・ヴェストファーレンの工業社会は、議会において、すでにヴィヘルンの時代に、日曜労働のどんな制限にも反対し、どんなに激しく突き進んだことだろう。だが、ここで中央委員会はヴィヘルンの遺言に忠実にとどまった。その遺言は、1871年10月10日に公表された彼の最後の公的な発言で、「いわゆる保守的な経営者の多くは、自由主義経営者も同様に、自分の過去のあやまちを責めるべきであり、またほかの非常に多くの問題に罪があるように、たとえば利己心、貪欲、そして利己主義が両方の党全体にあるということも責めるべきである。家族は本質的に真の日曜日によって生きる。」[10]

結果は期待したようにはならなかった。1885年、政府がアンケート調査を行った時、日曜の労働は全工場の半分だけが行っていた。ここで内国伝道がたゆまず行ってきた活動の影響を過小評価することはできなかった。1889年、中央委員会は、もう一度日曜休日の陳情を行った。1891年、国はついに日曜労働禁止の通達をだした。

中央委員会は、オルデンベルクが『フリーゲンデンプレッター』で忠告した、あの純粋に否定的な態度から、ビスマルクの社会改革事業によって、肯定的な協力者に呼び戻された。中央委員会は、そのことを適切に理解し、社会政策の優れた専門家の協力を確保した。中央委員会は、プロイセン通産省で上申委員をしていたテーオドーア・ローマンを、彼らの議員に選んだ(1880)。ローマンは、1881年からビスマ

ルクの2年半の間に彼がドイツ帝国宰相にとってじゃまになるまで、社会改革の熱心な協力者になった。健康保険事業は彼の重要な事業となった。[11]

健康保険法は1883年6月15日に成立し、疾病保険と老人保険に関する法は1889年6月22日に公布された。傷害保険法は1884年6月6日にすでに確定して交付された。ヨーロッパの模範となるこの社会福祉法は、社会主義者鎮圧法の不幸な影の部分に置かれていた。社会福祉法は強制された恵みとして憎まれている権力の手から来ているので、労働者階級を不機嫌にするだけであった。労働者階級にとって模範的なことがなされたのに、それは鬨みの騒音にかき消された。

テオドーア・ローマンはその時、官職を辞職し、それから社会福祉の経験をいかして中央委員会で自由に働いた。彼は、彼の計画をヴィヘルンとフーバーによってくわしく説明し、中央委員会はそれを自分のものにした。それはここで生まれた聖書的思考の基礎を展開したもので、まったく成熟した、よくまとまった論文であった。ローマンは、資本家を寛大に扱わず、神の前で責任を意識しない、世俗的、唯物論的な実生活の正体を暴露した。彼は国の援助と労働者の自助と内国伝道の同胞援護の関係について古い考えをもっていた。

そして、なお時代遅れになった観念に固執したという点で、彼の計画全体は病んでいた。ローマンは資本家を、彼の騎士領で - 大農場主がキリスト教の伝統によって悪い時も良い時も農場労働者とその家族を誠実に気遣い、すべてが互いに一つの大家族を形成した - そういう責任をもった貴族の古い理想像に例えた。ローマンは、この良き父権制の状況が、地方で広く[問題を]解決していくようには思えなかった。他方、産業の中で定着していた社会学的・社会政策上の様式は、決して農業経営と比べることはできなかった。[12] ここにはもう一つの原則が重要であった。[13]

成果は誠実に考えたものではなかった。彼は現実の状況について肝心なことには言及しなかった。この方法では内国伝道は労働者階級との信頼関係をつくる事はできず、その運命を改善することもできなかった。内国伝道に助けを求めようとすればひどい扱いをうけねばな



らなかった。なにしろ、実行力と粘り強いエネルギーが中央委員会に欠けていた。内国伝道中央委員会は、すべての面で提案しようとしたが、そのために粘り強さをもって勇敢に闘うことも、場合によっては苦しむこともしなかった。結局、内国伝道中央委員会は十分に独立しているのではなく、国教会のように、国の成り行きにびったりくっついていてた。

社会主義者鎮圧法の時代に、超党派で社会問題の解決に取り組もうという呼びかけは次第に消えていった。ローマンが1884年に出した陳情書は、中央委員会によって「産業に関する教会と内国伝道の課題と今日の社会闘争」というタイトルで、数千冊に印刷されて、内国伝道のすべての会、牧会者会議、新聞、政府のメンバー、ビスマルク自身、帝国議会の議員たち、そして社会福祉問題で協力をする全ての社会生活をする人たちに配布された。だがすべては変わらず、過去のままであり続けた。それはあまりにも学問的で、なんらかの義務と結びついていなかった！

ここで、1918年ドイツ帝国崩壊に至るまで中央委員会と内国伝道が努力してきたすべての真の悲劇的なものが明らかになった。人は心あたたかく、そして慎重に時代の激しい問題を明らかにし、その問題を避けることは絶対にしなかった。それが明らかになって適切な方針が出された後、まさに力強く取組み、さらに磨きをかけて管理がされた。

このことは緊急の社会問題に対してだけ起こったのではない。そうではなく、その当時はじまったばかりの内国伝道のように、教会が盛んに取り組んだ福音伝道運動の問題の中においても同様に起こった。ドイツの南と西において、1884年以来、自由福音伝道者として偉大な成果をもつエリアス・シュレンクが、まずブレーメン、フランクフルト・アム・マインの町で、またカッセルで福音伝道を行った。他の場所は別として、数千もの反キリスト教の人たちが借りたホールで、実際に聖書を伝え、ついには広々とした都市の教会に移動し、そこで人々が息をつまらせるように聞き入った福音伝道のこの先駆者は教会的に成功した。

この偉大な福音伝道者の活動は、何度もおこなわれた都市伝道と内

国伝道ともう一つの活動分野をはじめ第1歩となった。例えば、カッセルの教会当局のある人が言ったように、「カッセルで実際にキリスト教的生活をしているほとんど全ての人、シュレンクの福音伝道で戻ってきた。」[14]

エリアス・シュレンクの背後に、1881年にすでに「福音伝道協会」を創設し福音伝道学校「ヨハノイム」を設立したボンのクリストリープ教授がいた。ここでエリアス・シュレンクは必要な援助者、共に闘う同志、そして後続の弟子を生み出す偉大な福音伝道者となっていた。安定した牧師職との協力は、はじめから考えられていた、また反教会の多くの人たちのなかで、彼らと共に活動をおし進めようとした。福音伝道活動の150年の経験に対して、アングロサクソン人の国々では、まず、最初の経験を収集し、そして慎重に前に進まなければならないということが、はっきり認識されるようになった。

だが、この福音伝道運動はたちまち牧師たちの不信と敵対の壁に直面した。この問題は中央委員会カッセル会議(1888)で公に話し合うことになった。セルの講演「神の国における信徒の活動、その必要性和その限界」は事柄を公平に扱っていなかった。「満ち足りた精神」のなかで述べられたテーマは、「内国伝道が、教会を離脱しようとしている人たちを、共同体に忠実に組み込んでいく方向において、完成するしかない」という考えによっていた。「今日重要なことは新しい組織が必要なのではなく、共同体援護を組織するために、準備ができたすべての仲間と組織が意識的に統合することが必要である」。これは福音伝道のひそかな拒絶を意味したが、よりによって、カッセルの地で、シュレンクの活動の成果は、教会共同体のキリスト者の生活が強められていることをはっきり示した。[15] なお、内国伝道のふところに福音伝道を受入れる問題は、多くの会議の中で、中央委員会を動かした。ついに時代が「神の言の特別な宣教」を必要としていることを認めた。福音伝道運動は、内国伝道の「当然の仕事」として、按手をうけた牧師が再度加入するまで「応急処置」としてながい間行われた。

そうこうするうちに、福音伝道運動と共同体運動の部門は独立した。中央委員会はたしかに、福音伝道によって、内国伝道の小さな労働者

の多くのグループが新しい活力を受けているとは見ないで、信仰に覚醒し勝利した協力者は、奉仕に甘んじ、これまでのやり方にとどまっていた。せいぜい多くの原則を強調し、経験をとおして適切な考えを友好的に求めて、待ち、観察し、試みて、好意的に思い、共感するが、有効な手助けや協力はしなかった。[16]

そう、専門誌はドイツにおける福音伝道の発展について辛抱強く沈黙を守ったのである。ヴィヘルンは『フリーゲンデンブレッター』が伝道者の生活のどんな小さな活動も誠実に記録し、それが励ましとなることを喜んでいて、いまや内国伝道の要職につき、編集室にすわり、「非常に控えめに、おそらく途方にくれた様子で待っていた。」あるいは中央委員会の書記、ラーレンベックのような人たちは「まさに拒絶した」のである。告白主義者テオドーア・シェーファーは、記念祭の講演「半世紀の内国伝道」さえも、福音伝道運動の友とのはっきりした清算のために用いた。だが彼が福音伝道活動を描いた絵は、ゆがめられ、正しいものではなかった。福音伝道運動はいくらそうしたくても、その点が再認識されることはなかった。

すでに内国伝道のひざもとで運動していること、あるいはそこで起こっていることしか知らないという偏狭は、いくつもの真の神学的な、また宗派の不安を広げた。人は、困窮を全体の中に見ないまま、十分に活発であったし、ある種の相違をこえたおおらかな協力を呼びかけ、その偉大な神学的深さによって友を得ようとした。[17] 1896年のアイゼナッハの教会会議と1897年のプロイセンの総会でよい出発をしたにもかかわらず、教会離脱が起こったように、福音伝道運動を内国伝道のひざもとに受け入れることに失敗した。福音伝道運動の一人の友はダムマンが『光と生』で言っているように、激しく反抗した。すなわち「教会の保証だけを求めるならば、また不安だけが頭に浮かぶならば、牧師はその職の中でわずらわしくなり、人々は考えを変え、また混乱をひきおこすだろう。思うところに吹く霊が活動する余地を一度も与えられないならば、思想が信仰を失った10万の魂に向かって心を震わせることが一度もなければ、その時、福音伝道と共同体援護について協議することはふさわしくないし、また役に立たない。」[18]

教区総監督カフタンは、当時すでに広く反キリスト教であったシュレースヴィヒ - ホルシュタインで、よりによって次のように主張した。「ルター教会は、特別な国民伝道対策でなしえた以上に、(礼拝、牧会、また儀式)というこれまでの手段をもって、離脱者に近づこうとした。」[19] そこでなお、1911年12月15日、キールの長老会はベルリンで、プロイセン領邦教会のなかに「信徒が説教壇から宗教的講話をおこなったところがあるかどうか」を問い合わせた。カフタンのベルリンの兄弟ユリウスは「福音主義教会総会の意向は否である」と答えた。[20]

自由主義者、告白主義者、また教会の内国伝道の人たちは、内国伝道の中に福音伝道運動をうまく取り入れ、また、教会離脱を防止した。福音伝道運動は、福音主義教会の内部で、全体教会の中ではなく、牧師の友人たちの間だけで、その市民権をなんとか保っていた。ほんのわずかな福音伝道者の中のサムエル・ケラーは、エリアス・シュレンクに歩み寄り、ドイツの国はいまや誰もが福音伝道者になろうとしない唯一の国であるという彼の古い訴えが正しいことを確認した。[21] また、福音伝道の才能であるカリスマ的なものは不十分にしか発揮されなかった。

中央委員会は慎重で控えめな態度を変えておらず、中央委員会には必要な事務職員と秘書が、神学の臨時雇いのように足りなかった。そこで、1887年から1896年まで中央委員会の委員長だったD. ベルンハルト・ヴァイス教授の議長の下に、その弟子たちの中から後に国の保健局長となったオットー・ゲーベル、1907年産業界出身で商工会長ジューメンスとハルスケ、そしてA.G. ジューメンス・シュツケルト・ヴェルケ、フリードリヒ・アルバート・シュピーケラーが委員長となってあとを継いだ。

時代の要求の背後に、残念ながら取り残されたものとの関連で、おなじように19世紀の全体を通して移民の困窮がずっと未解決の傷のまま残っていた。移民の自由の問題は、フランス革命の影響を通して、ヨーロッパの国々の基本的人権の中に入り口をみつけた。1831年から1900年までの間に、ほぼ500万人のドイツ人が主に北アメリカに移住

した。

イギリスの植民地支配が終わったあと、北アメリカでは、すべての市民の自由と思いがけぬ科学の発展の可能性をもつ新しい国が姿をあらわしてきた。ヨーロッパの移住者たちにとって、門は未来の国にむかって広く開かれるように思われた。

1848年にドイツで起った革命の後「暗黒の反動」と自由を求める者たちは追放され、100万人の「民主主義者」と「48人」がドイツから北アメリカへ移住した。1873年にドイツで大量の労働者解雇と突然の労賃引き下げが始まった直後、巨大な一団が続いた。1881年、ビスマルクの社会主義者鎮圧法は20万人以上の人をアメリカに追放した。

この反動は、移民の自由の保障を未解決のままにした。ドイツの国々は、一部は全く無関心に振舞った。追放されて貧しくなった人たちがいつも歓迎されないことはなかった。人は飢えの苦しみから解放された。港湾都市で渡航の間の実際の援護は十分でなく、また外国における法律の助けはなかった。

ドイツ福音主義国教会は移民の数を心配しないようにしていた。国教会は任務にはっきりした限界があることを国境で知った。このことから、純粋に伝統的、保守的、また父権制的なものとなって、この立場を軽くしていたドイツ福音主義共同体の特殊な構造がはっきりした。この大きな移民運動は実際には殆ど知られていなかったのである。小教区から信徒を排除する者は視野を失う。別れの礼拝、あるいは最後の晩餐会の催しがあってもよさそうなキリスト教共同体であるのに、そこからなにかの励ましを受けることはなかった。移民する人たちは、人に知られることもなくひっそりと消えていった。

それに対して、強い関心が国民的、人間的な気持ちを持つ市民の中で働いて移民に対する人間的、社会的、国家的な計画と努力がなされ、世間で読まれる文学が生まれた。

だが、信仰覚醒運動も同様に移民への道を見いだした。これはバーゼルのドイツ・キリスト教協会の内部にすでにあった。1815年に設立されたバスラーミッションは、ロシアに移民するドイツ人家族の世話をした。1828年に設立されたライン宣教団体は1837年ヴッパータール

に「北アメリカ福音主義ドイツ人キリスト教協会」を創設した。ヴィルヘルム・レーエとヘルマンズブルクの偉大な国民説教家ルイス・ハームス(1808-1865)はルター派のさまざまなグループと同様に、移民の世話をした。ヴィルヘルム・レーエの提案により1850年まで62名の牧師が派遣された。ベルリンミッションはケープタウンに移民したドイツ人の世話などをした。

さまざまな会と団体で移民活動をした人たちは、1849年に出版された「ドイツ国民への覚書」でヴィヘルンを知った。

彼らが目指した活動は、結局、福音主義教会に神の言葉を純粹に正しく語らない人たちがいなくなることであり、即ち、神の言をふさわしい方法で聞き、聞いて自分にあらわれるチャンスを見出すことであり、またそれがなくても求めてチャンスを見出すことである。[22]

彼は大声で訴え、「ほかの土地に移住する者、ほかの土地に去る者たちはキリスト教学校と教会を伴わないでは移住すべきではない……。祖国を離れて他国に移動した息子たちが精神的に失うものは、(人口過剰を避けて)移住して、物質的に得たものより以上に、限りなく大きい」と言った。

彼は外国に移住した人たちの外面的な困窮だけを正しく知らなかった。彼はロンドン、パリ、マルセイユにいるドイツ人労働者が共産主義無神論者たちによって脅迫されているのを見、また、北アメリカで「最も救いがたく、最も軽薄で、最も過激なドイツ人の不信仰」に驚いた。彼はレーエがブレーメンで組織したように、移住した人たちの中で、アメリカの教会のつながりを通して啓発するような、徹底的な牧会と、聖書と文書の頒布を考えた。彼は「イギリスとアメリカの非常に多くの船で行われていた」渡船での船上礼拝をしようと思った。

ヴィヘルンは行動を開始した。1844年から1851年まで、ラウエスハウスから最初の新しい兄弟たちが、北米の各教区にコロニーの説教者として送られた。実現されなかったが、ピッツバーグ兄弟の家の創設も試みられた。内国伝道の仲間内では - それはドイツ・プロテスタントの信仰覚醒運動から直接に生まれたものではない - 1832年に設立された最初で最大のグスタフ・アドルフ協会との親密な協力が始まった。

手工業に従事する青年、日常的にオランダ国境を往来している人、ハーフェル地方でリピッシェンレンガを焼く労働者、新しく建設される鉄道労働者と運河労働者、ドイツ保養地の湯治客たちの、移動する人たちすべてを牧会するという基本思想のもとで、移民援護が中央委員会の努力に組み込まれた。

ヘッセン政府は、ヴェッテルスアウで増加してきた、毎年エージェントに誘われてカリフォルニアへ行く、いわゆる踊り子たちの乱れた状態を、中央委員会の指示にしたがって阻止するようになった。[23] 船員伝道の開始がつづいて起こり、「この最も感謝に満ちた全ての伝道支部」がハンブルク、ブレーメン、アントワープ、ロッテルダムで、フル、リヴァプール、そして海峡沿いの国で続いて生まれた。

そのための河川の船員援護と、全世界の外国の港にいるドイツ人船員への牧会的追跡援護という与えられた任務がなされた。

だが10万人の故郷を離れたドイツ人移民たちの場合、その背後でわずかな友人仲間で祈りをささげて行う努力は焼け石に水だった。[24]

そのことに関して、1852年にアイゼナッハのドイツ福音主義教会会議が移民援護をはじめようにした、友好的で気遣う態度は事態を何も変えることはなかった。福音主義教会がその招聘された教会指導者によって、数100万人ものドイツ人移民たちに半世紀の間になしえたことは、ささやかなものであった。[25]

心配になっている大きな困窮が、もう一つの分野にあった。ドイツから追い出された数10万人もの裸になった困窮者たちが、ドイツの国と領主に対して懐いている恨みは、国教会とその牧師たちもその反感の中に巻き込んだ。

ヴィヘルンの偉大さと意味はなんら変わることはなかったが、ここでは、内国伝道とディアコニーのこの先駆者は、その実践行動において保守的君主的、またキリスト教国家思想を強めることにとらわれ、そうした影響を抑止しなければならないという、彼の限界もあった。また内国伝道中央委員会の最初の人事構成において、ヴェトマン・ホルヴェクやシュタールのような主要な人たちはプロイセンに生まれつつある保守党と親密な関係にあった。彼らは1848年の革命における

ヴィヘルンのように、下からの、国民からの、国家を改造しようとする反キリスト教の、またサタンのあらゆる奮闘を見た。彼らは、「すべての悪事は国のすべてのことに逆らい、そこからほかのすべての悪事が、からだと命、物質的なものと精神的なもの、名誉と礼節に反逆して生まれる」というようにすべてを見た。[26] このヴィヘルンの言葉は1848年の革命に反対して語られた最も激しい言葉とみられる。無信仰に対する挑戦の言葉は、すべての立場と政党に向けられており、ヴィヘルンも同様にいつも超党派の立場の高さを保ち、「政治的理由で移住するドイツ人の100万人の大部分に対する教会と宗教の面談可能性」をこの事実は妨げた。[27]

彼らの教会によっては政治的にはもう理解されない100万人の群れとなったドイツ人移民は、放任され、ドイツ宗教改革の母教会との関係を失い、多くはアングロサクソンの信仰覚醒した教会に吸収された。だが、彼らは、それぞれに努力して、弱い力によってドイツの教会を援助し、国外に福音主義教会を創設し、後半世紀の初めと、あとで、再生したドイツ教会とその神学との生きた関係を保った。

内国伝道中央委員会が後に取り残されていく状況の全体を正しく見るならば、委員会と内国伝道が運動全体として認識して行ったことを、大きな全体像の中でみななければならない。なおドイツ領邦教会は国家と結びつき、明らかに社会的に消えていく社会階層となり、ブルジョワ化した。ここで広範囲な活動を目指したが、そのすべての目標に対する厳しい妨害があった。教会と教会民は、急速に自由な歩みを始めた国について行けなかった。中央委員会は、内国伝道運動の実際の化身として、無数の系にブルジョワ化し、保守的な気分をもつ教会とつながった。ただ、内国伝道とディアコニーの内部で男女が計画し語り実現しようとしたことは、たいして大きな刺激もなく恥かしい並の教会から、際立きわだっていた。内国伝道と外国伝道のために、自由な奉仕のために柔軟で、献身的で信仰深い仲間が領邦教会の中に集まった。彼らはみな手厳しく拒絶されたにもかかわらず、国庫財産を受ける教会のただなかで、ますますひどくなる非キリスト教化に直面して、不安であったし不安であり続けた。彼らは、教会の自己満足について驚き



の目で見、思い切って新しい分野にいどみ、嵐と攻撃に身をさらした。

彼らは当時、悪戦苦闘した困窮から工業労働者になった人たちと100万人のドイツ人移民となって行った人たちの双方の大きな闘いに勝ってはいなかった。

なぜ大陸での発展が、とりわけドイツにおいては他のアングロサクソンの国より以上に完全に進み、教会とキリスト教と、また労働者の間の裂け目にひびが入らなかったのか、すべて明確に述べられねばならなかった。19世紀に教会から見捨てられた極貧の子どもたちについてのヴィヘルンの痛みを忘れることはできない。

だが、このことは福音主義国教会の複雑な姿の、また世紀の変わり目に向かう、一面にすぎない。私たちはドイツ福音主義領邦教会の中に国当局と強く結びついているプロイセン領邦教会の場合も同じようにすべてを否定的に見るだけではいけない。教会政治の状況は複雑であった。大学の神学は卒業後分解された。神学状況の中にある全般的な内的な不確かさは教会指導部の中に反映されていた。中部ドイツと北ドイツの領邦教会はそれによって最も強い打撃をうけた。

だが、教会指導部は内国伝道の活動を促進した。彼らは慈善活動の中で共同体牧師を妨害せず、慈善活動の中で効果的に協力した。彼らの限られた可能性の枠の中で、彼らはこの奉仕を求め、励ました。

領邦教会とその個々の教会の中で、内国伝道が愛と犠牲をもってなす活発で辛抱強い多くの元気な協力者がいた。人の意見や国の同意を気にしないで、彼らは「福音主義教会の社会奉仕の申し出」を実行した。それはすべての領邦教会の中で限りなく誠実に行われるようになった。

組織された「働き人」を認める所でだけ、重要な場面で知られるように働く所でだけ、何かが起こるという印象を絶対に与えてはならない。多くのこと、また決めごとは、暗黙の中でなされた。働き人それ自身には、まったく内的生命や精神的発展というものはなかった。一つの見方と別の見方、その両方を総合して検討する時、はじめてわれわれは第1次世界大戦以前の教会について公正な判断を下すことが出来る。そこに停滞はなかった。プロイセン領邦教会と根から結びつい

た偉大な2人の人物、ヴィヘルンの遺産を受継ぎ、おびえる人の魂のために闘いを新しく開始した、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとアドルフ・シュテッカーが前面に出てきた。

## 2

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク（1831-1910）

てんかん病患者と貧困放浪者の父 - 政策の道 - 労働者住宅

最近のこの10世紀の教会史のなかで「アッシジのフランシスとマルチン・ルターだけが十分にこの方法で、ボーデルシュヴィンクのように人の魂に触れていた」ことを確かめようと思うならば、そう多くを語る必要はない。彼の人格の力を少しでも逃れうる人はわずかしかなかった、また彼はすでに存命中に一連の聖人伝となって知られていた。

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、彼の若き日の成長を、1857年9月6日に、ヴェストファーレン教会当局の最初の神学試験を志願した時に提出したラテン語の直筆経歴の中に、次のように書き記している。<sup>[28]</sup> 「私、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは1831年3月6日、私の父エルンストが当時郡長をしていた北ヴェストファーレンの小さな町テックレンブルクで生まれた。」彼の父は、後にプロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世の大臣となり、彼の母は信仰においては信仰覚醒運動の出身であった。フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは11歳から17歳まで「成績はそれほど悪くなく喜んで」ベルリンのヨアキムスターラー・ギムナジウムに通った。1848年の革命の年は、父をヴェストファーレンにある父方の大農場の生活に戻した。革命によって内的に厳しい損傷を受けたプロイセン国の混乱した状況は、公務員になるために、ベルリン大学で法学を学ぼうとしていたフリードリヒ・ボーデルシュヴィンクを思いとどまらせた。彼は農場経営の職に身をささげる決心をした。2年間ずっと「私は大きな国有地で農業を学ぼうとした。その後私は首

都に帰り、祖国の兵役義務に赴いた。だが兵役の3ヶ月のうちに、私はひどい肺病になった。身体的に非常に弱く、田舎暮らしに戻らなければならなかった。一方、私は以前からの父の希望で兵役義務を果たし、その後新たに大学で、法学の勉強を始め、その後、その助けを借りて、自分の成功を考えずに、国に仕える事ができるだろうと思った。」[29]

ボーデルシュヴィンクは、農場主でポンメルンの州長官であるゼンフト・フォン・ピルザッハの父と親しくしていた、彼の非常に大きなポンメルンの農場グラメンツの経営を引継いだ。

ピルザッハは、分別を失うほどに熱狂して未開地を耕作して財産を増やそうとはしない、農民を気遣う、優れた農場主であった。彼は可能な限り多くの小作地を彼の農場経営に直接組み入れるべきだと思った。「そのために、家族と十分な生活ができる独立した農民が、腹を空かせた労働者を見下すようになったことを、彼は見なかったし、見ようとしなかった。彼は見るができなかったのである。さらに、厳しい統合によってポンメルンにおける生活環境を安定させ、そうして革命を撃退できると信じた。彼の息子ボーデルシュヴィンクが熱愛した友人オッターは、父に不平を言ったが、彼はその時、政治的、社会的破局を予見していた。」[30] しかし、彼は切々たる嘆きで満足した。

青年フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、天才的に有能な農場主としての招聘を受けただけではない。彼は悲惨な境遇の中にいる人々に決定的な影響を及ぼした。監督官はくつろぎを邪魔されないように、外見上の厳格な外的秩序に安心していた。彼らは農民たちの実際の生活をよくしようとはしなかった。けれどもボーデルシュヴィンクは、この人たちがどんなに火酒を飲んで抑制の効かない中毒になり、粗野な楽しみがどんなに人生を破壊するかを見た。「力づくで、かつ独断的に介入しなければ」ならない家族の生活環境を適切に世話しないで、私は何もなし得なかった。「これが私の最初の心配でした。」と彼は彼の父に報告した。そこで、私はほとんど毎日、ひどい窮乏のすべての地域にはいり、多くの家庭で文字通り家政を指導した。・・・私はグラメンツにいるすべての人々の運命を、監督官のボ

スから解放し、その300ターレル分のすべての責任を引き受けた。」

なにが彼の全生涯にわたってずっと際立っていたかといえ、それは23年間ずっと現われている、貧しい人々に対する憐れみ深い献身、保護しようとする気高い準備、そしてまた所有の権利からの完全な自由、とりわけ組織し教育する偉大な教育の才能が際立っていた。[31]

グラメンツにおいて、彼は真の召命に達した。彼は中国人の貧しい少年「陳」の物語を読んで、これまで目標としてきた職業を根本的に変えられた。

神学研究をするようにとの神の声がボーデルシュヴィンクに迫った。「その時、以前にもまして厳しく拒んできた神の手が私に触れた。私がしようとしている以上のもっと大きな外からの力と、私自身が他の人に劣らず罪を犯し、間違いをおかす者であることを恐れた。それは唯一の救い主に、私の避け所になってもらわなければならなくなったほどに私を恐れさせた。同じ頃に、最愛の父を亡くし、心の出会いを増やしていった。」[32]

ボーデルシュヴィンクは、宣教館で、また大学で神学を学ぶために、また一度は宣教師として異教徒のもとに赴き、イエス・キリストの証人となるために、バーゼルに行った。彼は、聖書の中にあるキリスト教指針の深みを解き明かし熱中させる教師をカール・アウグスト・アウベランの中に見出した。彼は神の国を、キリスト教の国として理解するように学んだのではなく、将来のイエス・キリストの出現を待ちわびるために、彼〔イエス・キリスト〕の証しをして将来に仕えるための十字架と巡礼の共同体を結びつける兄弟会として学んだ。

彼はエアランゲン大学に一時滞在したが、ここでノイエンデッテルスアウでの活動で知った偉大なルター教会のヴィルヘルム・レーエに学んだ。パートボルにいた有名な父ブルームハルト訪問は、思いがけないことで起こった。彼はホーヘンシュタウフェン山の高地で激しい雷雨にあい、そこですっかりずぶぬれになって、立ち寄らざるを得なくなって訪問したのである。「敬愛する父ブルームハルトはその時、思わず彼のところに立ち寄った若き学生たちを、父親のように受入れた。彼はすべての点で私の心を打ち明けることができる彼に、信頼を持っ

た。大いなる祝福によって生まれたこの共同体の絆は、彼の最後の日まで結ばれた、そのような数日間を彼のところに滞在した。」「[33] レーエとブルームハルトの2人の出会いはアウベランの聖書神学との出会いと同じように決定的に重要な意味をボーデルシュヴィンクに与えた。

ボーデルシュヴィンクは良好な成績で試験を終えたあと、ドイツ人ルター教会共同体の補助説教者としてパリに派遣され、まる6年間滞在した。その結果、彼は第2の神学試験を免除された。青年牧師は、ヘッセンから移住しパリの道路清掃人をしている貧しい家族の面倒を見、励ます教会を建て、学校を設立し、しつけと礼節のための教育によって面倒を見た。彼は差し迫ったプロレタリア化をうまく防いだ。ボーデルシュヴィンクの特別な才能は、教育による影響、とりわけ子ども達との交流の中で、また病人牧会の中で証明された。

すでに、彼の名声は、彼がパリでの経験をドイツ教会の新聞に発表した報告によって知られていた。彼の敬虔深い熱中はすでに明らかになっており、それと同時に、来るべき神の国の栄光を信じる信仰のために、罪の赦しの道を宣べ伝えた。彼にとって教会共同体は来るべき主に向かって遍歴する、その群れであった。

ボーデルシュヴィンクは、1861年4月18日、彼のいとこのイダ・フォン・ボーデルシュヴィンクとパリで結婚した。彼の若い妻は病弱な体質であったため、結局、ヴェストファーレンの共同体、ウンナ近郊のデルヴィヒで第2の牧会職を引受けた。このヴェストファーレンの農村においても同様に、彼の教育的、信仰覚醒的才能は発揮された。彼はここで村落共同体に伝わる紀元前からの伝承を大きく変えた。たとえば、射撃祭を宣教祭に変えてしまった。彼の包み込むやり方は、彼らに、いったん向こう見ずだという言葉を言わせた。「人は一度だけ生きる」は説教では「人は一度だけ生き、一度だけ死ぬ」というように導かれた。

だが、それと並んで彼があきらめねばならなかったパリ市民の仕事の特別な不安が問題であった。ボーデルシュヴィンクは驚くべき頑強さをもって1905年まで、1870年から1871年のドイツ-フランス戦争の間だけでなく、脅かされた就職口が存続するように尽力した。[34]

デルヴィヒで、彼は政治的なまた他にも時代の出来事を定期的に論評した保守的なキリスト教日曜新聞の「ヴェストファーレン家の友」の出版を引き受けた。1865年から彼はこの新聞を指導した。そこで私たちは真の召命へと次第に成長していく神学者ボーデルシュヴィンクを新聞で知ることが出来る。

1866年1月に、デルヴィヒで、彼の4人の子どもたち、3人の息子と1人の娘が百日咳の流行病で亡くなった。「私たちの4人の子ども達が死んだ時、私はまず神が人間に対しどんなに冷酷であるのか、そしてまた、このことから、私はほかの人に対して憐れみ深くなっていることに気づいた。」4人の子どもの死についての報告を読む者は、彼を2度と忘れることはなかった。<sup>[35]</sup>「彼は病人のベッドで、永遠の門の前では、若い時の、また老いた時の姿は消えてなくなることを知った。彼は、子どもたちの墓で、聖なる憐れみ深い神が、私たち人間に信じることを教えるために恵みの審きへと導かれたこと、キリストの十字架を起こされたこと、またキリストの十字架以来、あらゆるところで神が愛したもう世界に帰る道が用意されていることを知った。」<sup>[36]</sup>

ボーデルシュヴィンクは40歳でヴェストファーレンの農村社会から、ディアコニッセの施設をつくる前の5年間の指導を引き受けたビーレフェルトに招かれた。それと同時に彼はシュパレンブルクのはずれにある農場の中に一時的に寝泊りしていたてんかん性の子どもの面倒をみななければならなかった。ささやかな始まりから、キリスト教会の中に、奉仕を通して慈善を生み出すもっとも独創的な事業を行う憐れみの町が成長した。それは、彼が、クリスコナの指導、インドのゴスナーミッションの指導、故郷の事業の指導、そしてベルリン中央ディアコニー施設ベタニアの指導の申し出を受けたあと、彼をとらえた第5番目の招聘であった。

1867年以来続いている「てんかん病患者のための救済施設と看護施設」と1869年に作られたディアコニー母の家サレプタの2つの事業をボーデルシュヴィンクは兼務で指導した。それに数年後に兄弟の施設ナザレが発足した。それによってすべては内的統一性をもつように

なった。

てんかん病の人たちになす彼の活動は先駆的なものとなった。てんかん病はほかの病気と一列に並べることができないことを彼はすぐに知った。てんかん性の人たちは発作から開放されている時に「元気な場合」は、健康な人たちと同じであり、それどころか彼らにあらわれた才能は、しばしば健康な人たちよりも優れていた。彼は「傷つけられた」ものであるという意識をまず受けとめ、そして彼らに故郷と労働と自尊心を与えた。彼は「作業療法」の発見者となった。ベートルでは、もっとも弱い人もそれぞれ一緒に働くというしっかりしたきまりが大切にされた。創意工夫に富んだ愛は、最も貧しい人々にも意味のある仕事を仲介し、彼らに粘り強さと整理によって自尊心を回復し、共に作り出された全体の枝とした。彼はヴィヘルンとペスタロッツィから家族思想を、また古い救護活動から祝祭文化を受け継いだ。祭りの祝典は創意に満ちた豊かさの中ですべてが互いに結び合って活動するベートルという合言葉となった。

けれども、ベートルの中心に、ノイエンデッテルスアウのレーエがしたように、能力をもつ患者たちが協力して建てた礼拝堂、シオン教会が出来上った。礼拝順序はレーエの影響をうけた。ここでは発作に見舞われた人の叫び声の中でも同じように「私はあなたの深い憐れみを隠れ場としており、主イエス・キリストの恵みを求めます」という告白と慰めが鳴り響いた。<sup>[37]</sup> 詩篇 126 編はベートルの詩篇となった。

「主がシオンのとらわれ人を解放される時、彼らは夢見る人のようになった。その時、私たちの口は笑い声に満ち、舌はほめ歌が満ちる。人は異邦人[Heiden]の下で言う。私たちはそのことを喜び祝います。主は偉大なことを彼らになさった！主は偉大なことを私たちになさった！あなたは小川の水を早春の大地に戻すように、主は私たち捕らわれ人を連れ戻してくださる。」「涙と共に種まく人は、喜びをもって刈り入れる。彼らは出て行き、そして泣きながら尊い種を運び、喜びをもって、その束を運んで帰ってくる。」

てんかん病のわずかな人たちだけが治って、退院できた。だが多くの人はここで自由に生きる共同体にとどまった。健康な共同体も、彼

らと共に同じ「救い主」を待ち望んだ。神学を終末論的に伝えるばあい、すべての難問に基本的な信念を持って告白し、きたるべき主が、健康な人も病人も含めて、目に見える牢獄も、目に見えない牢獄もすべての牢獄を打ち砕き、ベーテルがドイツ内国伝道の内部で生まれつつあることを実現できると、思い切って答えようとした。

ボーデルシュヴィンクは、それが最もよい奉仕であることを証明し、彼が出すように指示した国王に請願する方法を知っていた。彼はおさえがたい陽気さをもって生き活きと願うことができた。たとえば1891年、施設に豊かな地下水脈を使用できるように、農場エノンを手に入れた。毎日5万リッターの水を得ることができた。5万マルクの購入価格になった。そこでボーデルシュヴィンクは「これから毎日、私たちの貧しい病人に1リットルの新鮮な水を提供するために」1マルクを献げてもらえませんか。こう言って、すべての読者に呼びかけた。この金額は短時間で楽に集められたけれども、アメリカの百万長者カーネギーが彼に多額の金を贈ろうとした時、彼は驚いて拒絶した。彼を助けることができない百万長者は、贈物を寄付するだけでなく、彼の事業のために祈る単純な人でしかなかった。[38]

神の前での明るさとのんきさと、主の日が来る前兆をなしている愛の奉仕をする喜びが、彼の神学からうまれた。このことはドイツの慈善活動の中に新しい響きをなした。

ボーデルシュヴィンクがベーテルを引継いだ10年後、この活動の限界を超えて、国民の大きな社会問題を引き受けた時、彼の多くの友は驚いた。1871年の楽な勝利とフランス戦争の犠牲となった数10億の財宝の後に、大規模な経済戦争がドイツで続いて起こった。1880年ごろ、およそ20万人のパンを求める工場労働者たちが、職人たちが遍歴する国中の古い街道を移動していた。突然起こった非常事態に、これまで開設した91の施設「故郷の宿泊所」は足りなかった。毎日20～30人の物乞いが施設の門をたたいた。ボーデルシュヴィンクが1時間の作業をした人に、昼食提供を始めた、その日に、2～3人の「街道の愛する兄弟たち」があらわれた。

だが、その時ボーデルシュヴィンクはさらに先に進んだ。ある人が



助けを求めて、ずっとここにいさせてくださいと願った。「もし、あなたがてんかん病であるならば、私はあなたをとどめることもできるのに。」「私もてんかんです。」ボーデルシュヴィンクに思ってもいなかった答えが返ってきた。街道にでてくる20万人の失業した工場労働者の困窮は、「すべての人が共同の責任をもっている資本主義と社会のてんかん病ではないか？」彼はフランクフルトの牧師グスタフ・シュロツサーからこの躰きの石を引き受け、ヴュルテンベルクの手本になって、共済年金協会と農業コロニーを創設した。彼はおどろくべき粘り強さをもって、放浪する貧困者のための労働者コロニーの設立を進めた。まず1891年、彼はコロニーをビーレフェルトとパーダーボルンの間にあるゼンネに建設した。ここでお金のない200人の放浪者に、3～4ヶ月「施し物を受ける代わりに労働」としてハイデボーデンの開墾をする仕事を与えた。1898年、ボーデルシュヴィンクは、泥炭を掘り出す泥地を干拓していたドゥンメルゼーのヴィーテングスモールの広大な用地に、緊急の大きなコロニーを建設した。ボーデルシュヴィンクは家を失った人々の避難所の困窮を知り、ベルリン市民のために、首都の北方に、そこに収容された各人は個室をもらえるコロニー・ホフマンシュタールをつくった。[39]

ベルリン中央協会ドイツ労働者コロニーは、ボーデルシュヴィンクの肝いりで1884年2月12日に建てられた。その中に、彼の忠告を受けて労働の推進者となり、これまで続けてきたコロニー協会が統合された。プロテスタントとカトリック協会は調整して一緒になった。ゼンネにあるヴィルヘルムドルフ労働者コロニーの開始以来1891年まで、20の福音主義と2つのカトリックのコロニーが設立された。[40]

これらのコロニーは、後の皇帝フリードリヒの皇太子の銀婚式から補助金を受けなくても、「自由な教会の慈善活動」ですまはべきであった。職を失った工場労働者たちが歩く主な街道でなされた給食ステーションの緊急ネットワークをつくることは、まず第1に、ボーデルシュヴィンクの信念によると国当局と地方自治体がなすべき要件であった。ここで道徳に反する物乞いを禁止するために、宿泊所と給食はある程度の仕事をした人に対してだけ与えられた。ボーデルシュ

ヴィンクはどのステーションでも「心暖まる木造の部屋」を望んだ。シュタインクロッペンには彼にとっては緊急打開策と考えていた。

行政区域ミンデン全体の模範的な規定が、ボーデルシュヴィンクの関係で実施された(1883)。ここでステーションの間ネットは、放浪貧民がステーションからステーションへ物乞いせずに行けるほど、非常に緊密であった。成果は納得できるものであった。「放浪」はここではほとんど完全になくなった。この模範にしたがってボーデルシュヴィンクは国の全域を組織しようとした。

ボーデルシュヴィンクは同時に「簡易宿泊所」の緊密なネットを望んだ。ポンの最初の宿泊所創立者の息子でビーレフェルト・ギムナジウム教師オットー・ベルテスは、1年間、委員会の指示で、手工業者に変えて、宿泊所のありかたを考えるために、宿泊所とステーションを巡回し、独自の考えをもつようになった。

ボーデルシュヴィンクは1884年プレスラウまでの旅行を計画した。ボーデルシュヴィンクはこの報告から社会革命が接近しているという確信を得た。そしてそのことについて個人的に良く知っている皇太子に、同年10月の終わりに次のような手紙を書いた。

「社会民主主義のアジテーションは、有力な手段を手にし、実際に権利を主張し地位を守ることに反対して、ほかの方法で権力からの解放を闘えるようになることよりも、また彼らが権力を得ている現実の不正よりも、ブルジョワ階級の利己主義を取り除いてしまいました。」<sup>[41]</sup>

しかし、今度は、ボーデルシュヴィンクは、1886年2月18日にベルリンで決議された「ドイツ宿泊所協会」の設立へと向かった。オルデンベベルク牧師は内国伝道中央委員会の書記長としてこの件を引き受けることをはっきりと拒んだ。結局、中央委員会は、宿泊所が彼らをまったく避けて、お金をもたない工業労働者によって感情を傷つけられないように、支払いをする遍歴職人のためにだけ宿泊所を開くという、古いペルテッシェンの線を完全に守ろうとした。

だが、ボーデルシュヴィンクはこの状況についてもっと知っていた。常習となった物乞いはすでに「簡易宿泊所」を訪れていた。どの宿泊所所長が、この状況の中で、誰が宿泊代を物乞いで得たペニヒで支

払った宿泊客なのか、誰が、まじめに働いたお金で勘定を支払った宿泊客であるか、見分けることが出来ただろうか？ 1884年から1890年までの7年間に198の新しい宿泊所が生まれた。1893年まで、その数は426に昇った。2～3の地方教会、もしくは領邦教会は、この活動のための募金を許可したが、たとえば他のハンザ同盟の町、カッセル、フランクフルト・アム・マイン、メクレンブルクとリップペ-デットモルの両者、ヴァルデック、ヘッセン-ダルムシュタット、アンハルト、チューリンゲンの国々と南ドイツは拒絶した。

ついにボーデルシュヴィンクは積極的な政策の道へと進み、1903年9月末にキリスト教保守党の候補者として立候補した。放浪貧民の援護が彼を駆り立てた。失業をなくすための法的規制の問題は、もはや彼を休ませなかった。ボーデルシュヴィンクはプロイセン国議会で活動を始めた。彼はフォン・ヴィルヘルム2世に非常に失望させられるようになった。

「私がどのようにしてそれを国王陛下に正直にまた誠実に願って、台無しにされたかを、あなたが知るならば、また無関心に対して彼をどのように説得したかを、あなたがたは納得するでしょう。私は貧しいドイツの祖国のために、祈りによってのみ統治し、暗い道を通して光へと導くことができる。」[42]

ボーデルシュヴィンクは、今までに心ひそかにしてきたように、領主に最後の決断を譲るのではなく、そうするのではなく立憲君主制で洗練された議会の譲った。1904年と1909年の間、ボーデルシュヴィンクはプロイセン議会で働いた。1904年5月5日、ボーデルシュヴィンクは領邦議会で第2の演説をした。人は彼を注目するようになった。

「演壇のまわりにはびっしりと群がり、施設のメンバーが立ち、そして演説者の言うことに文字通り耳を傾けた。ひとことももらさないように聞き入った。会場を深く支配していた沈黙は、衝撃を与える機知に富んだ語り口がよび起こした爆笑によって、中断された。彼が終わりに『アーメン』と言った時、感謝に満ちた議会の拍手はなりやまなかった。しかし、まったく尊敬すべき老人は演壇に登ったように、そこを去り、すべての祝辞を、大臣からさえも逃れた。」[43] ボーデル

シュヴィンクは「運河建設案」の際に、労働者の最下層の人たちに、憐れみ深い社会的責任をもった取り扱いをするように勧告した。運河建設案に対する彼の賛成は殆ど背後に後退した。公共の新聞ではポードルシュヴィンクの演説の反響は大きく、後まで続いた。

ポードルシュヴィンクは共通のプログラムを持って来たのではなく、まったく具体的な願いを持って来たので、国会議員と政府の代表者に強い影響を与えた。それゆえに彼は、ベートルで健康な人と病気の人を同じように扱うように、彼らを同じものとして扱った。

国会や省では、かたくるしい「あなた・あなたがた」[Sie]がふさわしい呼び名とされているが、それはここでは「きみ」や「きみたち」[DuやIhr]であった。ベルリン省庁の守衛たちは「父のようなポードルシュヴィンク」をよく知り、愛した。そして彼のどんな障害も取りのぞいてくれた。1907年ポードルシュヴィンクはプロイセンを放棄する貧民救済調整法規定を成立させた。そうこうするうちに、新しい緊急の問題と困窮が起こり、その結果この法律は意味を持たなくなった。

[44]

第2の社会的困窮地域がポードルシュヴィンクの関心をとらえた。工業都市のなかで不健康な長屋にひしめきあって暮らしている労働者階級の住宅難は問題であった。中央委員会がキリスト教家庭<sup>きほんてき</sup>生活のために始め、そしてひどい住宅難になしたすべての欺瞞的なことは、何の助けになったのだろうか？「自分の土地に住む人たちを承認することは労働者階級を援助し、また健康な家庭生活を励まし、保持する、もっとも有効な手段であり、そして社会生活の領域でこれほど重要な課題はなくなってきている。」

1885年、彼は「労働者の家」の会をつくった。会の1人は個人用住宅のために預金をすると約束した。町の工場で働く住民だけでなく、大農場で働く労働者も同じように「一区画の相続分」をもらえる。

1888年の内国伝道中央委員会カッセル会議で、ポードルシュヴィンクは発展をつづける工業都市ビーレフェルトの門の前に、協会によって建てられる「労働者の家」42の2戸建住宅に、83人の労働者と手工業者の家族を住まわせると言った。彼の影響をうけて、どの大都市に

も中央委員会がそのような協会をつくった。

またここで、当時、ふたたび好調になってきたドイツの経済と財政状態を考えると、ボーデルシュヴィンクの遠大な計画は十分に実行可能となっていたのである。だが中央委員会は「住宅難解消について」4頁に印刷した小さなパンフレットで満足し、その際、内国伝道協会によい助言をしたが、「建築組合として、労働者住宅等の建築を引き受け」なかった。<sup>[45]</sup> そのようにして、中央委員会は、再びボーデルシュヴィンクが強く迫った課題を回避した。

ボーデルシュヴィンクは落胆しなかった。彼はこの考えに賛成する事業家をさがした。エッセンでクルップと長い協議をしたあと、この要望は適切であるということが納得された。クルップは近いうちに労働者が所有権を持ち、工場に拘束されない600の家を建てると約束をした。またボーデルシュヴィンクは市の行政にも尽くした。彼の要望を理解したのはプレーメンとエルベフェルトの当局だけであった。ボーデルシュヴィンクは、同様に、国庫からの住宅建設計画のための融資を要求した。彼は1892年個人的にヴィルヘルム2世に手紙を書いた。ボーデルシュヴィンクの旅行の秘書は、訪問旅行と講演によって、ドイツのあちこちの「労働者の家」協会のことを語った。成果はささやかであった。健全な中産階級の所有関係のなかで、労働者階級が変り、その社会的隔たりを埋めるのは、ずっと先のことであり、そこでボーデルシュヴィンクは非常に急いでいた。彼はあきらめずに語り、「時間が少ししかない」ことを気にしていた。19世紀は、ひそかな不安が彼らを駆り立て、社会的緊張のゆえに「恐ろしく、ぞっとするような結果になるだろう。」<sup>[46]</sup>

なお、他に3つの制度の中で、ボーデルシュヴィンクは、ベートルで根づいた活動を拡大した。植民地熱の兆しの中でつくられ、まともな発展をしなかった「ドイツ-東アフリカ福音主義宣教組合」は、1906年、ボーデルシュヴィンクによって、「ベートルミッション」として引き継がれた。アフリカに関しても同じようにボーデルシュヴィンクは、伝道活動の時間は短く、それは有効に活用されねばならないと確信していた。「宣教活動はどんな時にも主の将来を待っている」と繰り返し

ボーデルシュヴィンクは語った。

それに、将来の牧師のための候補者寮の設立が加わった(1890)。ここで、半日は青い前掛けをしてペーテルの患者に奉仕し、一方で説教者のセミナーの計画に他の時間を使うようになった。

1904年、ボーデルシュヴィンクが施設の真ん中につくった神学校は奇抜なものであった。おどろいたことにプロイセン政府はすみやかに許可をした。当時大学で有勢であった自由主義に対して釣り合いがとれたものを建てるべきであった、この自由学部の講義は、2人の講師と11人の学生で始まった。入学した学生は教会的オリエンテーションを受け、信仰告白をともなった神学が準備された。この大学は始まった年に特色ある教育力を発揮した。

1910年4月2日、ボーデルシュヴィンクはペーテルで亡くなった。彼は亡くなる少し前に、ベルリンの無宿者救護所を通して「犯罪と飲酒癖と人間性すべての悪弊の温床」を歩きまわり、「まだ希望を失っていない人たちをさがして、ここに集めた」。彼は彼らのために労働者コロニー「ホフヌンクスタール」をベルリンの門の前につくった。元気が衰えた晩年に、彼はしばしば大声で言った。「進め年老いた怠け者」。[47] 彼は臨終の床で最後の言葉を語った。「心配するな、子どもたち、私たちの心配すべてを彼に委ねるのだ！」

マルティン・ラーデは「キリスト教世界」の中で、ボーデルシュヴィンクの意味について説得力ある面影を書いた。

「ボーデルシュヴィンクは4月2日、ペーテルで眠りについた。人もうらやむ豊かな生涯は終わりを迎えた。この人はなすべき多くの善行と、その全てに対して感謝を受けた。彼はドイツで最も愛され、最も尊敬された人といわれた時があった。党派や宗派の境界を超えて、今日は彼について、多くのよい言葉が語られ、書き記されるようになった。私たちの中に彼から感銘を受けず、とりこにならず、影響を受けなかった、そのような人がいるだろうか？忘れられない出会いが私の記憶にある・・・神はこの人の思い出という彼が残した大きな遺産を与えてくださった。何千もの人が心からそして良心から、彼の面影に最後の影響を受けたように、もっとも個性的な仕事を残した！」[48]

アドルフ・シュテッカーと反教會的ベルリンをめぐる闘い  
宮廷説教師 - 自由國民教會のために - ベルリン都市伝道  
皇帝の不興 - ボーデルシュヴィンクとの変わらない友情

1878年と1909年の間の時代に、フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクと並んで、もう一人の宮廷説教師であり、護民官であるアドルフ・シュテッカーほど福音主義教會の中で知られた人物はいない。2人は親しく協力した。「1人はもう1人について、友のライフワークが國民の將來の問題を決定することを知った。」

たとえ2人が互いに歩調をあわせることができなくても、ボーデルシュヴィンクはベルリンの宮廷説教師に変わらぬ友情をもっていた。2人は本質的に違っていた。ヴェストファーレンの貴族には、人々の政治活動への欲求と、政治的な議論をする情熱が欠けていた。新しい慈善活動のための資金を必要とした時、あるいは運命に打ちのめされたあらゆる階層の数え切れない人が助けを求めた時、ボーデルシュヴィンクは、彼の親戚関係とそれ以外のベルリンの宮廷社会に、また指導的な人たちとの関係に時間を費やすだけであった。[49]

アドルフ・シュテッカーはまったく違っていた。「彼の基本的動機が誠実さであることは間違いなかった。」そのことでは、ボーデルシュヴィンクは傍らで彼を助ける人であった。だが彼の闘いは全く別の分野にあった。ボーデルシュヴィンクの前では、断固として敵であった者がいつのまにか彼に深い尊敬をもっていた。彼の人格の力から逃れうる人は誰もいなかった。それをあえて汚す者は誰もいなかった。宮廷説教師は、無数の人たちから愛され賞賛され、数千の人たちから激しく拒絶された。最も独創的なドイツ人福音伝道者サムエル・ケラーは、シュテッカーについて次のように語ったことがある。「私はまさに彼のようにドイツじゅうを何度も通った。北から南、東から西へと旅をした。鉄道の中で、だれかれとなく話す会話で話題になる人はほか

ならぬシュテッカーであった。そこで、私が言葉をふと口にする時には、荒れ狂った憎悪の中でも、別のもっとも大きな感動の中でも、彼についてもっとも美しい会話をしていた。」・・・彼の名はすべての大衆新聞で、不平家たちとシュテッケライ！というように、いつも互いに違った言葉が同時に載っていた。」[50]

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクのライフワークがそうであったように、アドルフ・シュテッカーの活動は、ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの働きの継承と考えられる。アドルフ・シュテッカーのばあい、生涯を決めるきっかけとは、首都のために、また異邦の町ベルリンのために、闘うことであった。

この道は、アドルフ・シュテッカーの子ども時代には予想されないものであった。彼は1835年12月11日、職人組合の親方の子として、ハルベルシュタットのキュラジーレンの近くで生まれた。彼は4人兄弟のなかでただひとりとびぬけた才能を発揮した。6才でギムナジウムの1年に入学できる知識をもっていた。その数年後、小学校から直接ギムナジウムの第3学年になった。彼は正直で思いやりのある父を心から尊敬していた。意志の強い想像力豊かな母はギムナジウム参観をみとめさせた。

天分豊かなギムナジウムの生徒は - 信仰覚醒運動家である情熱的な大聖堂説教師ユラが学び、伝道師となり、そして親しい青年たちと聖書を学び、福音宣教の奉仕のために召されているという確信を持った - そのようなマルチン・ヒューゴ・ランゲの説教を聞き、従ってくるようにとの人格的な神の召命を感じた。

アドルフ・シュテッカーは、大聖堂説教師の家に、また枢密法律顧問官クリューガーの家に集まる信仰覚醒運動の人たちが、信仰の確信をもった。

「生徒や若者のいろいろな過ちは、有害な交際や誘惑によって、宗教的認識やぬくもりの欠如<sup>あがめ</sup>となり、その結果、私の生活は畏敬の念を持って上にあるものを真に崇めることのないままであった。私はよい生徒になったが、悪いキリスト教徒になった。私は良心が私を責めることなく長い間愛されて暮らしていた学校の最後の年、1853年の夏に、



ついに神は私を心にとめ、私に光をもたらした！」

ここで、クリュガーハウスの信仰覚醒的、敬虔主義的な気分にさせる交わりの中で、青年の信仰は強固なものとなった。

「そう、そのころ私はキリスト教の生活の中に深く導かれ、そこから再び信仰の重大な迷いや否認におちいることは一度もなかった。」[51]

アドルフ・シュテッカーは深刻な疑念をもたないままであった。だが、彼には多くの内的な道徳的闘いがあった。

「私はなんども絶望のふちに立って、深い虚無に落ちていくような思いになったことがある。だが私は深いところから、キリストの恵み深い顔が私を照らして輝かせた - この深みの中で私はすべての虚栄心とすべての功名心とすべての悪欲、自己正当化するすべてを沈めて、この深みの中で、闇のただ中に、神の恵みを見た。なお、しばしば古い自分がついつい姿をあらわすことがあるが、それは力なく、ほとんど一瞬でも目をさますことができない幻である。いと高き方の守りは居心地がよい。・・・私の本性は根本悪の荒海、流れに追われ、怪物の深みに入って行く。だが、本当に導いてくれる者のいない闘いの中で、主はいつも私を助けてくださった。・・・そして、いま、喜びに満ちた愛の中に成長する、勝者に与えられる厳しい務めが多くあり、それは大きな闘いの賞であったということ、私はまったく知らなかった。・・・キリストの死の痛みのなかで、私の生がはじまるということがわかる前は、私は長い間格闘していた。・・・しかし、信仰のすべての星が、深い夜に私を沈める時に、ゴルゴタの真っ赤な恵の太陽が昇った。その時、私は自分の魂に平和がないことを知り、そこで私の心は私の主を熱心にあがめて静まるようになった。」[52]

この人の胸は、闘いによって非常に激しく非常に情熱的に揺れるようになり、外的生活は非常に心を揺り動かされた状態になった。彼は神学研究をハレで、後にベルリンで、スパルタ式の儉約によってのみ可能とした。

「私の外的状況はとても乏しいものであったが、私はなんとかやってきた。私は美しい家の門で、もちろん屋根の下に密集している、ひと月たった3ターレルの大きな住居をみつけた。家の下には昼食ができ

る地下室があった。そのうえ私たちは困窮をまったく障害とは考えず、ただたんに自分と世界に勝つための試練と思っていた。また一度は、私たち同室者は6週間のあいだずっと地下室で昼食のパンだけを食べたことがある。早朝はしばらく井戸に行き、夕方は美しい家の並木道を散歩した。苦情を訴えるものはなにもなく、私たちは四旬節の断食の時にもかかわらず勤勉な学生でありえたことを喜んだ。」

シュテッカーはベルリンで最初の神学試験を受け、マゲデブルクで合格した第2の試験のあとに、ランブスドルフ伯爵の家庭教師としてクアランドに行った。1870年と71年の独仏戦争の後、シュテッカーはドイツが征服して新しく手に入れたメッツの地区牧師職に応募しその職についた。シュテッカーは兵士のためだけでなく、移住してきたドイツ人プロテスタント信者の困窮のためにも努力した。彼は病人のためのディアコニー・ステーションと福音主義の高等女学校をつくり、そこで授業をした。教会建築が軌道に乗ってきた。そのようにシュテッカーはベルリンに招かれる前から内国伝道の仕事の分野で中心的人物であった。

1874年10月18日、彼はベルリンで空席になっていた第4番目の宮廷説教師と大聖堂付説教師の地位についた。当時、福音主義ベルリンが悲運に見舞われた時代であった。1874年10月1日配偶者関係法が発効した。従来 of 洗礼と婚礼の義務はすべて記憶から失われた。それは事実上、従来 of 国教会というものの終わりを意味した。

「新年にびっくりするような統計上の証拠を私たちに示して、起こったなにかを期待する人は誰もいなかった、またそれでひどく悲観する人もいなかった。ここベルリンで戸籍上の婚姻を結んだ結婚は、100のうち18から19だけが教会で祝福を受けたものであった。100人のうち52名だけが洗礼をうけていた。」

これがシュテッカーのベルリンでの出発であった。ベルリンの人たちの間では、教会への嘲笑とキリスト教信仰へのあざけりが、ベルリン大衆の手本となっていた。正式の「民事婚の流行」が野放図に広まった。指導的階級の若いカップルたちは、教会を軽蔑していることをはっきりしめすために、あとで教会の祝福をうけることはしないで、

戸籍課で華やかに結婚の約束を行った。教養ある人たちの間では、教会に属さないことがよい手本とされた。

ベルリンでは、すでに何千もの洗礼を受けていない人がいることがわかると、進歩新聞は「万歳!ベルリンの非キリスト教徒・最初の千人」と宣言した。ある有名な進歩的な新聞が「生きるのは楽しい、今日では、教会の影響を受けずに、人は生きたり死んだりできる」などと間違いを語り、趣味の悪い言動を始めた。』[53] 社会民主新聞は、日刊紙で、ラディカルで市民的な自由主義論評だけを続け、労働者たちの列の中で教会とキリスト教の衰退を心配した。

そのような首都で離反が起こりえることは難しい問題であった。「たしかにフランス革命では、困ったことがあったが、キリスト教が存在する限り、教会体制への軽蔑はその当時のベルリンのように、非常に多数の、非常に屈辱的に、非常に圧倒的に、突出することは決してなかった。」1870年と71年にフランスに進軍したドイツ軍はなんと宗教的に高揚した気分を満たされていたことだろう。青年アルフレートは当時ライプツィヒにいる父に宛てて感極まった感動を次のように書いた。「キリスト教があるかぎり、セダンの日のような、そのようなドイツのテ・デウムはまだ一度も歌われることはないでしょう。」

シュテッカー自身ある日のことについて次のように報告している。

「その時、宗教的・道徳的な目で私たちの国民を観察した人たちは、1870年に、特に戦争の最初の一ヶ月のあいだ、私たちの民はこれまでにない敬神の念に満たされていたという意見で一致していた。』[54]

プロテスタント、カトリック、そしてユダヤ教徒のための軍隊牧会は、戦争の間輝かしく組織されていた。野戦病院には150人以上の聖職者が準備された。そのためなお360の戦場奉仕に対して、また看護教育を受けた神学の志願者が数えられた。トロイ、オルレアン、アミアン、シャルトルの大聖堂は、祈る兵士たちに満ち、そこに多くのプロテスタント信者がいた。

ソルフェリーノの戦場を訪ねたあと(1861)、スイス人博愛主義者アンリ・デュナン(1828-1910)によってすすめられた赤十字ジュネーヴ会議は、明確な神の祝福をうけ、ドイツ-オランダ戦争の後1864年8月

22日に設立された。この旗のもとで負傷者であるならば戦闘外では、敵味方の区別はされなかった。「硝煙と炎の中で、医師と看護師が平和活動をする間に赤十字の旗が舞っているのをみた人は、戦争の只中で進められているキリスト教のなにかの力を感じ、また神の国が再び来るべき力を感じた。」その時はそう感じたのである。戦争のその年にドイツの指導者たち、ヴィルヘルム1世、ローン、モルトケ、ビスマルクの宗教的な行動は意味深いものだった。[55]

そしていまやこの帝国の首都にある教会の没落！以前にあった宗教的情熱は、すべて吹き飛ばされたかのように思われた。3つの理由が深い意味もなく指摘された。会社乱立時代(1871-73)の10億人、文化闘争、そして社会民主主義の革命宣伝である。

それに対して、わずかな仕事しかない宮廷説教師シュテッカーは良心の呵責かしやくを感じた。彼は個人牧会を始めた。彼は毎日5人から6人の学生たちを戸別訪問した。その当時社会民主主義の新聞は冷静に次のように言っている。「これは、怠ってきた牧会のためにベルリンの人たちが発行した領収書である。」

シュテッカーは、子どもを正しい名前と呼ぶようにした。教会が国と領主を束縛することは、教会離脱に致命的な役割を果たした。「王座と祭壇」の結合は、多くの社会民主主義者たちの離脱を防ぎ、キリスト教の明確な福音理解を広めると思われた。聖職者たちは、下層階級の人たちに宗教をもたせ、また従順でいいなりにさせる「黒い警察」と思われるだけであった。

シュテッカーは、自由国民教会の中で国教会が変貌するのは避けられないと思った。ここに取り戻さなければならぬ遅れがあった。領主は民の生活の中で絶対的な力を失った。彼らの権利は議会によって制限された。だが、教会の領域の中で、王冠は教会法の(最高監督)[*summus episcopus*]の意味で、指導者としてのこれまでのある種の影響を持っていると主張した。おそらく、これは領主がこれまで教会の中で直接行使してきたが、国民議会に移したある種の権限もあった。これはすべてをよいものにしたのではなく、ひどいものにしただけであった。というのは、いまや国会議員たちは、プロテスタントがカト

リックかあるいは無神論者であるかを、自分で決めていた。

プロイセンでは、ドイツで一番大きな福音主義領邦教会が1873年の憲法による教会総会の中で立法権をもっていた。だがこの教会総会は国の省に依存したままで、責任ある大臣を恐れず、プロイセンの教会総会はかつて実際に一度解散させられたことがある。教会当局のメンバーは、教区監督も同じく、王に好まれた人たちの中から直接任命された。国はそのようにすることが出来、また都市の機関は自由なカトリック教会があえてしなかったことを、自由のない福音主義教会と一緒に遠慮せずに行うことが出来た。

シュテッカーは、まず国に縛られている教会を解放する闘いだけに身をおいた。彼は大胆にもプロイセンの王に、領邦教会の最高監督としてのこれまでの権利はないとし、王には後援者という形に限定した発言をするように求めた。

国から自由な国民教会を求める呼びかけは、教会にベルリン市民を取り戻すためのシュテッカーの闘いの一部だった。

「ことによると、教会は後になって問題に殆ど口出しをしないか、まったく口出ししないようにもくろんだのかもしれない。国に対する関係は、原則的には束縛であり、各教区監督の任命にいたるまで、教理問答から讚美歌集、教会生活の証まで、大臣のコントロールの下にあり、また奉仕者の教育はほとんど完全に国の手中に納められることをもくろんでいたのだ。」<sup>[56]</sup>

シュテッカーのこの願いは、当時の若き世代の神学生だけに理解されていた。年配の人たちは増え続ける教会離脱を考えると、自由な国民教会の中よりも国の保護の下に守られていると感じたのである。

1877年、シュテッカーがベルリンに入って4年後、初め兼任であったベルリン都市伝道を引き継いだ。ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは、すでに1858年、プロッツェンゼーのベルリン門の前に、「福音主義ヨハネ・シュティフト」を第2の兄弟施設として作り、救済施設をもつラウエスハウスの隣に、また刑務所看守の養成学校をつくった。ここで都市伝道事業のディアコーンも同様に養成されるようになった。だが、この事業はまっすぐには進展しなかった。それと並ん

で、第2の小さな都市伝道が、職務上の指導は妨げになるだけということを見分けた教区総監督ブルックナーの指導の下で、はじまった。

「そこで、D.ブルックナーは1877年、都市伝道の指導をやめて、それを私の手に移した、そこで私はいつも同じ協力関係を活発にし、そのために有能な牧師に助言と助力をもって全面的に協力する青年たちを励ました。私は都市伝道が新しいボランティアの形でなしうる大きな発展を予感した。

その時、別の場所でも都市伝道が始まった。ヨハネシュティフトやヴィヘルンの古い財団は、都市伝道を始めのために1877年に1人の牧師と5人の都市伝道者が活動を始めた同じ方法で維持されていた。私はこの2つを初期段階で合わせることに成功した。その時故フォン・ベトマン - ホルヴェク大臣が助けてくれた。内国伝道中央委員会は統合を進めた。この事は私の指導のもとでなされ、それは私の人生の30年間ずっと大変な苦勞であったが、また同様に最も大きな喜びともなった。』[57]

ここから反キリスト教のベルリンへの真の攻撃が始まった。家庭訪問はすべての都市伝道の基礎となった。子どもたちは子ども礼拝に招かれた。そのためにホールが借りられた。その中に聖書を学ぶ人が集まった。盛んになっていく文書伝道、ホールと礼拝堂で増え続ける聖書研究グループと都市伝道会の数は、慈善事業とならんで、主な事業分野であった。貧民救済、釈放囚人の援護、子どもの学校、裁縫教室、「フライアーアーベント」会館などが、それに属した。男性の会、女性の会、青年会、少女会が生まれた。

ここで信徒同盟がでてくるようになった。いわゆる「使徒職」とよばれる、民衆のなかからでた質実な人がここで実証された。学問的教育を受けた牧師でない手工業者、労働者、勤労者がディアコニーの養成を受けた後にベルリンの都市伝道職に呼ばれるようになった。彼らは、ベルリンの市民と労働者と、まともに付き合い、彼らの話題を話し、困窮と不安を理解した。

家庭訪問をすると、まず仕事の遅れを取り戻すことが最も強く心配

されていた。この事業はあとでより強い福音主義の性格を受継いだ。

多くの特別な活動が始まった。夜の伝道は売春婦を救おうとした。そのための娘と妻の避難所がつくられた。辻馬車の御者伝道はこれらの日曜日のない人たちのために尽力した。少年合唱団は、悲惨なとても暗い長屋の裏庭でもお金を集めてまわった。ここでもみ言葉の宣教がなされた。さらに拡大された活動は、長屋の真ん中にある質素なホールや集会室に、伝道に出る信仰の準備をしている仲間と、伝道の準備ができた仲間たちを集めた。

シュテッカーは、週に一度「すべての人にとって一つの事件であった」金曜日の会議に、彼の協力者、視察官と都市伝道者その他の協力者を集めた。都市伝道者たちは活動報告をした。シュテッカーはいつも大都市の困窮に関する最上の情報をもっていた。

初め1万1千マルクであった都市伝道活動の年収は、5年後には7万8千マルクに上り、更に20万マルクを目指した。シュテッカーは都市伝道に新しい友を得るために労を惜しまなかった。ベルリンではとりわけ女性協会が救援組織をつくった。プロイセンの県では県の救援会が年に1度の祝祭を催した。皇帝の館ではかなりの寄付が集められた。マルク、ボンメルン、東プロイセン、シュレージエン、西部・中部ドイツも持続的に寄付を送った。そのように大きな伝道分野が首都で、国内のもっと多くの仲間たちの関心事となった。

シュテッカーは、外国の友が喜んで立ち寄り、この方法で事業資金を援助するキリスト教宿泊所をベルリンにつくった。ついに教会総会は、ベルリンの都市伝道のために全ての領邦教会で一年間献金をつけることを決議した。この活動の成果は明白であった。

まもなく他の大都市、中都市が、ベルリンを手本にして都市伝道を、一部は福音主義の、一部はカリタスの救援目標を共に掲げた。1887年にはすでにドイツの27に都市伝道会があった。1927年にはベルリン都市伝道は7人の牧師と30人の都市伝道者と5人の青年担当書記、4人の神学教師志願者と60人の都市伝道女性奉仕者と12人のほかに主な仕事をもつ協力者を数えた。[58]

都市伝道は多くの奉仕をしてきた。

第1次世界大戦前、社会民主主義者が要求し予想した福音主義領邦教会からの大量脱退は起らなかった。このことは疑いもなく、都市伝道の犠牲をいとわない不屈の活動によると言うべきであり、その成果については社会民主主義の活動家たちもある種の尊敬を隠さなかった。

他方、都市伝道は労働者階層の宗教的教會的荒廃がどういう状況にあるかを示しただけでなく、道徳的な危険を伴う長屋の中にある非常事態を明らかにしただけではない。都市伝道は、強い感受性をもつ反教会の人たちに、真のキリスト教の教えを示し、またそのためにこの活動を援助する教会を励ますことができた。教会は避けがたい反教会運動を無防備でなすがままにしてはならなかった！ [58\*]

また、もう一つの点で、シュテッカーはベルリンの教会の中に新しい道をつくった。彼はベルリンにどんなに教会と牧師が足りないかを知った。すべての県から、とりわけ東プロイセンとシュレージエンから、100万都市になったベルリンに向って何千もの人たちがどっと流れこんだ。この10万の人たちのために教会と牧師が足りなかった。10万人になった巨大教区に対してわずかな牧師が働き、その力を職務行為と堅信礼教育で消耗するというようなことは珍しいことではなくなった。1870年と1890年の間にベルリンに2つの教会が建てられただけであった。シュテッカーは1893年のシカゴ万国博覧会で伝道をした時、アメリカとドイツの大都市の間にある違いを見た。そこで、同じ期間にアメリカで250の教会が建てられたのに対して、ベルリンで建てられた教会は2つであった。これは、行動に踏み込んでいかない教会指導者たちだけの責任ではなかった。これはベルリンの都市教区を統治するのに、新しい教会と牧師に何の手段も認めないベルリンのリベラルな市民階級の人たちにも責任があった。

シュテッカーは自由主義に対する教会の闘いにも立ち上がった。積極的な小教区の会が援助して、ついに困難な10年間の闘いにおいて、都市教区に多くの積極的な人が得られた。1888年、ここでも教会建築を始めることができた。そしてなおうんざりするほどの困難があった。1890年、都市教区は少なくとも5つの新しい教会を次の会計年度内に建築するため、教会税を所得税の5,5%から7%に上げる決定をした。



ベルリン市議会は賛成しなかった。ビスマルク自身教会税の値上げに反対し拒否権を行使し、シュテッカーの思うようにさせなかった。だがそれは新しい方向に進むことを阻止する最後の試みであった。都市教区は、一年たってベルリンにおける教会税10%の値上げを全員一致の決定によってやりぬいた。[59]

シュテッカーはドイツとアメリカを巡回する伝道者フォン・シュルムバッハに伝道のために数ヶ月ベルリンに来てほしいと頼んだ。ベルリンキリスト教青年会はこのシュルムバッハの活動によってピュクレル伯爵の指導の下にあるミッヒェル会のように、営林監督官フォン・ロートキルヒを委員長として始まった。「決然としたキリスト教青年同盟」を創設した時の強い衝撃も同じように宮廷説教師から始まった。[60]

宮廷説教師を大都市の社会的に最も困難な状況にある大多数の人と親しく接触させた都市伝道活動は、彼を政治への架け橋とした。彼は社会政策の論争の舞台に上がった。

彼の提案によって1877年に辺境の牧師ルドルフ・トートの勇敢な本『急進的なドイツ社会主義とキリスト教社会』、それは「キリスト教の社会的価値と、キリスト教社会の社会的課題の叙述が新約聖書の研究を基礎にしてなされた」ものである。トートはキリストを「社会主義者」と理解し、政党社会主義の全体は、社会主義の本質的要素をなさない無神論を別として、福音に矛盾しないと考えた。

彼の本は直接に革命的なものではなかった。というのは、トートはキリスト教の国家思想に立って、来るべき国家社会主義、福祉国家、また出勤に助けられて責任感のあるキリスト教の仲間が社会的混沌を静めることを期待した。改革は国と社会を支持するこれまでの人たちが始めるべきであった。福音主義教会は「国の良心」となるべきであって、また「活きた良心を、特に国とその立法を、義と愛のキリスト教の霊をもつ同じパン種として清めるべきである。」[61]

この本は正統教会の中では100パーセント拒否され、内国伝道中央委員会はこの本を敬遠し、『フリーゲンデンプレッター』は執拗にそのことを隠し通した。ボーデルシュヴィンクの『家の友』だけがこの本

を、「工場主、牧師、新聞編集局、そして行政官」に、「極めて注目すべき読み物」として推薦していた。[62]

トートと国民経済学者アドルフ・ワグナーとルドルフ・マイヤーによって始められた「宗教的・君主的社会改革中央協会」にシュテッカーは短い期間入った。だがこの協会でなされた学術講演は宮廷説教師に満足できるものではなかった。キリスト教と教会からの下層階級の研究者たちが離脱していくことも同じように手に負えなかった。シュテッカーは、彼の時代のために、また王の宮廷説教師として思い切った決断をし、「キリスト教社会労働者党」を設立して政治の舞台に登場した。

「私を駆り立てたものは、底知れぬ深みにうごめいているものの中に見た貧しい人たちをとりまく絶望であり、また、私が救おうとした人々たちへの愛であった。・・・そこで私は祈り願って、社会民主党の中に入って、野性の牛の角を捕らえて、これと闘うことを決心した。」[63]

この動機をもってシュテッカーは彼の政治的な道を始めた。彼がその時、彼の党に説明した計画は、すべて完全に、後でシュテッカーの協力を受けずに実現された8つの労働者計画に従うものであった。[64]

都市伝道活動を引き受けた1年後の1878年1月3日、シュテッカーは、キリスト教労働党を結成するために、代理人を通して公開集会の開催を呼びかけた。これがベルリン市の北部にある大広間にちなんで「アイスケラー」と名づけられた「アイスケラー集会」を開催した。

シュテッカーは「アイスケラー」集会を、彼の人生で最も重要なものと考えていた。ここで彼は熱狂した大衆の魔女の踊りの真ん中に、国民集会のタバコの煙と乾杯のグラスが鳴る中に、社会民主主義の集会を指導する最大の社会民主主義労働者のもとにある、聖書台に進み出た。彼はたぐいまれな言葉をたくみに使うことが出来た。激しい演説合戦になった。彼は反対者に勝ちたいと思った。

「労働者の生活は守られねばならない。身体障害者も同様に世話を受けなければならない。寡婦かふや孤児もパンを得るべきである。だが、このことはあなたの不幸です、私の主よ、あなたはあなたの福祉国家を思っておられます。人が改善しようと、あなたに手を差し出す時、人

があなたを助けようとする時、その時あなたはあざけりをたしなめていう。『私たちは何も満ちたりた状況にはない。私たちは福祉国家を望んでいる』。それと同時に、あなたは他の階級を敵視し、すべてを憎んでいる。・・・私の主よ、あなたは彼らの祖国を嫌われる。彼らの新聞にはこの憎しみが非常に燃え上がっている。それは悪いことである。ちょうどある人が彼の母を憎むように祖国を憎んでいる。彼らはキリスト教も同じように憎む。彼らは神の恵みの福音を憎んでいる。彼らはあなたがたに不信仰を説き、無神論を教え、また偽預言者を信用している。・・・人の胸のうちに信じられている、神への愛と祖国への愛という最も高貴なものを殺すことが許されていなかった時に、あなたが望んだように労働党は実際に歴史的な意味を持っていた・・・』

社会民主党のドイツ国会議員、製本屋のヨハネス・モストは社会民主党の最急進派の代表者、後のアナキストであり、最後にはアメリカで役者になって燃えるような雄弁で集会に集まったすべての人たちを熱狂させた。彼はその当時ベルリンで荒々しい煽動家であった。「宮廷説教師殿に感動している人たちの中に、目の前にある民の困窮を理解している人がいるのかどうか疑わしい。」「たとえ太陽が牧師野郎すべてを暗くし、イナゴの大群のように押し寄せるようなことがあったとしても」と、彼は恍惚となって叫んで言った。「社会民主党の労働者たち自身が、彼らの手段と目的を思いとどまることはないようになった」「キリスト教の時代はあとわずかである。あなた方の勘定書は、あなた方の天と、牧師野郎と、あなた方の命の日数を計算している」。<sup>[65]</sup>

「キリスト教社会労働党」の設立は、列席した労働者たちのほとんど満場一致で否決された。だが、その設立は行われた。同じように1,500人が参加したもう一つの会議で、可決されようとしていた。集会を壊そうとした社会民主党員の出席者たちがついにフランス国歌マルセイエーズを歌いはじめた。すると、シュテッカーは「われらの神は固い砦」を歌いはじめ、彼の友と一緒にもう一つの表決によって勝った。

新しい党と一緒に、社会民主党を撃退しようとする宮廷説教師の試みは失敗した。同じ年に皇帝暗殺事件が起こり、社会主義者鎮圧法が公布され、労働者たちがまず社会民主党員たちを貧しさの中に追い立

てた。新しいドイツ議会の選挙で、シュテッカーは選ばれなかった。

福音主義教会総会は新議長ヘルメスのもとで、国の組織全体として、ただちに社会主義者鎮圧法に賛成した、それにもかかわらず、国民の多くを占める「教会民」に第2の階級という烙印を押したシュテッカーは彼らから叱責をうけ(1878)、1879年2月20日の布告によって「一つの階層だけの利益を代表するようなすべての公的な党の結成」をやめることを牧師たちに義務づけた。それはトートの中央協会もキリスト教社会労働党も同じことと思われた。

しかしながらシュテッカーは新しい集会でいつもキリスト教と教会、国民と祖国のために闘うように呼びかけた。翌1879年、彼はベルリンで表面的には成功に導いた反ユダヤ<sup>せんどう</sup>扇動をはじめた。ベルリンのサロンには宮廷説教師の雄弁に感動して熱狂した小市民と中産階級の信奉者たちが急に集まってきた。この「ベルリン運動」は、1881年以来「キリスト教社会党」とだけ呼んできたものを市民的なものに変えた。

ベルリンの貧民党は、プロイセン国の全領地で味方を得た。1879年、シュテッカーはミンデン - ラーベンスブルク(ビーレフェルト - ヘルフォルト)の選挙区で、プロイセン議会議員に選ばれた。1881年、彼の選挙区だけで勝利し、国会に選出された。ヴェストファーレンの信仰覚醒運動の2つの中心はシュテッカーのキリスト教社会主義の計画と重なっていた。またボーデルシュヴィンクの「家庭の友」も同じようにシュテッカーの立候補を支持した。

シュテッカーはボーデルシュヴィンクと共に「ユダヤ人問題の批判」をし、それによってキリスト教社会党はシュテッカーが賛同した保守党内で反ユダヤ主義グループに結集した。

当時(1880年)、ベルリンだけで45,000人のユダヤ人がいたのに対して、英国全土に46,000人、フランス全土にはおよそ51,000人が住んでいた。反ユダヤ主義は当時諸民族に広まっていた。しかしながら、ボーデルシュヴィンクとシュテッカーの否定は、ベルリンの自由思想の「改革派ユダヤ教」だけにいえるのであって、抑制のない、また改革派ユダヤ教にコントロールされた新聞によって節度のない近代的かつ腐敗した不信仰を宣伝し、またあらゆる方法で市場での主導的な地

位を目指す、そのような改革派ユダヤ教に限って言えるのである。宗教的また道徳的に縛られていると自認する敬虔なユダヤ教に対して、シュテッカーはボーデルシュヴィンクと同様に異論はなかった。この中で、2人はその当時激しくののしる反ユダヤ主義宣伝から、他のことで重要な役割を演じた愛国的なグループを区別した。

シュテッカーに反対する200以上のユダヤ人のパンフレットが、悪意ある態度を表明していた。シュテッカーの反ユダヤ主義の闘いはより激しいものになった。ボーデルシュヴィンクはシュテッカーがサロンで新しいスタイルで話す最近の動向をすべて承認するわけにはいかなかった。1881年から1884年までの彼の全盛時代に、宮廷説教師であり、護民官であるシュテッカーは、大都市の近代の不敬虔なユダヤ教に対して、容赦のない態度をとり、ユダヤ教はエホバに背いており、エルサレムの街よりも多くの人たちが、エルサレム人の町に住んでいて、彼らは預言者の外套のかわりにまやかしの金箔の富で装っている。悪いのは彼らの神殿であり、拝金主義、下卑な代用宗教である。[66]

例えば、1883年シュテッカーがボックプロイライで「ベルリンのユダヤ人と社会生活」について報告をしていた時、次々にあらわされた賛意はこたまとなった。宮廷説教師、都市伝道の記者、教会の君主的・保守的政治家でありアジテーターであるシュテッカーは、この年「魅惑的で有力な立場」にあった。

だが、彼らはすでに目的を心得た敵対者によって徐々に名声にダメージを与えられるようになった。「キリスト教社会党」の指導者、多くの人から憎まれる男、シュテッカーは、自由思想のユダヤ教と自由主義思想が合わさったグループを扇動する野獣となった。その時、社会民主新聞は支持した。人は彼を訴訟に巻き込み、職権による調査で、罪でないことについて彼の陰口をたたくようになり、生活全体をすみずみまで調査されて疲れてしまった。「信心家ぶっている人とシュテックライ」と言ってけなし、また「クロイツ新聞」や「フォルク」のすべての派閥や、シュテッカーとアルフレッド・フォン・バーデルゼーから、皇后にいたるまでをさして言うのであるが、ピスマルク侯のジャーナリストたちはついにかれらの目的を達成した。[67]

皇帝ヴィルヘルム1世は、1885年、彼の宮廷説教師シュテッカーに対して、すべての政治活動を断念するように強いた。「私が公的に発言しなければならない時、私は宗教的、愛国的、また社会的な話題だけを語るようになり、ついにはキリスト教と教会と内国伝道についてだけ話すようになった。」[68] シュテッカーは反ユダヤ主義の闘争目標を断念しなけりばならなかつた。

皇帝がシュテッカーを完全に見捨てなかつたのは、王位継承者の長男、皇太子ヴィルヘルムが、彼の祖父に手紙で願ったおかげである。ホーヘンツォレルン君主国の忠実な闘士はこの人を見捨てなかつた。ヴィルヘルム1世は、彼の愛する孫に譲歩した。シュテッカーは最高宗務会議から「注意し自制するよう」に訓戒をうけた。

皇位継承者である後の皇帝フリードリヒ3世も同じように、キリスト教の社会的問題への取り組みに悪い感情をもっていた。ここで脅かされた友人のために尽力した騎士のようなボーデルシュヴィンクは、皇位継承者と交渉した。1885年8月22日、ボーデルシュヴィンクが皇位継承者に書いた次の手紙は重要である。

「私はどうも信じられません。シュテッカーは過ちについて責任がなく、また多くの点で彼の活動方法と一致していません・・・彼は(社会民主主義に対する勇氣ある闘いによって)、進歩党の怒りと、また私たちの民の最もよい真髓を搾取している株取引のユダヤ人への怒りを負うようになることを、全く予想していませんでした。シュテッカーは賢くなかつたし、計算もしていません。彼はそのことが私にとってなんになるのかとか、私がそのことで何をがまんすべきかと問うことはしません。そうではなく、いつも義務は何ですか、神の意思は何ですかと問うた。・・・シュテッカーはユダヤ人の宗教を決して攻撃していません。そうではなく、反対に先祖たちの信仰を捨てている、また背教したキリスト教徒と、十字架と王座、そして祭壇に対する憎しみの中に、宗教をなくしたユダヤ人だけに反対してきました。・・・皇帝と国に対して全き忠誠をもつ数千の、それどころか百万人のドイツ人がいると断言してもよい。また私たちの皇室はおそらくシュテッカー以上に勇敢であったり、献身的であったり、どうして

も必要な、僕、また戦士<sup>しもべ</sup>はいないという、私の確信を分かち合ってもよい……。また同様に私たちは次のことを信じています。シュテッカーが足を踏み入れた戦場がキリスト教と社会の将来に決戦の場となることを。また仮に戦いのなかで軍旗が傾くようなことになったとしても、彼は高められ、キリスト教のドイツ帝国時代となり、また私たちの敬愛するホーヘンツォレルン家の時代になって、神が恵みの内に守ろうとしておられるすべてのことを私たちは信じています。」「[69]

シュテッカーは一時的に救われた。2年後の1887年10月28日、シュテッカーも助言を求められて、有名な「ヴァルデルゼー集会」が召集された。

皇太子フリードリヒの死の病は暗い影を落としていた。後の皇帝ヴィルヘルム2世、ヴィルヘルム皇子に指輪がはめられた。人は彼にベルリン都市伝道を知らせた。社会問題がどんなに彼の心を打ったことか、また彼がベルリンの労働者の困窮を和らげようとする誠意をもっていることを、人は知った。

これに関して、皇太子夫妻はちょうど1887年11月28日、大臣、国会議員、廷臣、またプロイセンの教会指導者たちによって選ばれた人たちを、参謀本部のヴァルデルゼー伯爵のところで行われる予備協議に招いた。ここで皇太子はキリスト教 - 社会主義思想に明確に賛意をあらわして出席者を驚かせた。シュテッカーの都市伝道との親密な関係についての一件は予想外であった。将来の皇帝は、出席している4人の貴族のメンバーに都市伝道とそれに似た事業を大々的に援助する「協会設立委員会議長」を引き受けるように指示した。

1888年5月28日、初めはベルリンで、次にプロイセンの大都市で、また工業地帯で、現行のあるいは新しく設立された都市伝道が労働者を援護する「福音主義教会救援協会」が公式に設立された。同時に彼は資金の準備を通して、至るところで、巨大教区を縮小して、組織立った教会の援助を確保しようと思った。補助牧師、教区助手を任用してもよかったし、教区会館が建てられてもよかった。後援は後の女帝で後継者アウグステ・ヴィクトリアが引き受けた。

救援会は宮廷社会に定着し、みごとな救援会を組織し7桁の金額を

こえる資金を使うことができた。彼の親しい委員会の中で、皇太子妃の侍従である宮内庁官フライヘル・フォン・ミルバッハは、熟練した廷臣、真の主要人物になった。さらに多人数からなる委員会の中でボーデルシュヴィンクもおなじように選ばれた。ボーデルシュヴィンクはここで、とりわけベルリンの地に新しい教会と牧師職を設けるように求めた。教会建築特別委員会が出来て、そこから1890年5月2日、「ベルリン福音主義教会建築協会」が生まれた。

ミルバッハはここでも主役を演じた。「高貴な商業顧問官」という称号授与と引き換えに、<sup>ごうしゃ</sup>豪奢な新口マネスク様式の教会建築のための資金をあちこちから集めるようになった。教会建築協会に所属しなかったボーデルシュヴィンクは浪費された莫大な金額にため息をつきながら同意し、シュテッカーは敵意を持って彼を迫害したミルバッハに対して哀歌を歌っていた。

皇太子ヴィルヘルムが、ヴィルヘルム2世として王位についた時、彼は君主制を敵視する社会民主主義を撃退するために、社会福祉の立法をするように強くせまった。ドイツ人労働者は、君主制、キリスト教、そして教会に取り戻されなければならなかった。1890年2月4日、新皇帝は、布告の中で、内国伝道がヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン以来要求してきた国家社会主義の拡充を約束した。労働者の保健保護の更なる発展、労働時間の規定、経営者に対して労働者を十分に代表する人、国立鉱業所の整備、福祉の「モデル施設化」、そして十分な国の監視が約束された。そのことで、ヴィルヘルム2世とビスマルクが仲たがいをおこし、それに対して福音主義の仲間うちで、文化闘争以来、シュテッカーになかばあおられた敵対的気分が支配していた。

内国伝道と中央委員会の主だった職員の一群は安堵した。ローマンは「忘れられない瞬間」という講演をし、その中で1884年の彼の報告書よりも明確に教会の責任を除いた社会情勢の素描を示した。彼らは「大きな社会問題に正しく対処する時」を逃していた。彼は新しい状況を「実際の社会改革の道は、まず、2月4日、皇帝の布告の中で予告された対策によって進められるだろう」と率直に述べた。

ベルリンの教会総会は、1890年4月17日の長い布告で、古プロイセ



ン教会の牧師たちに、社会的困窮に対する労働者の闘いに、それぞれ可能な協力をするように呼びかけた。労働組合は創設されねばならなかったし、また、労働者の集会で牧師たちは啓蒙的に活動し、内国伝道はそれを援助すべきであり、あらゆる福祉の努力をして「健康な労働者住宅を建てる」会のように、関わるべきである。社会主義者鎮圧法の時代に出された正反対の通達は忘れられた。「労働者とその家族の経済的な福祉を求める要求は、その宗教的、道徳的生活の向上の前提でもある」と教会総会は言明した。

シュテッカーは「世界は一夜にしてキリスト教社会主義になった」と安堵した。彼は内国伝道の多くの人と共に、この新しいヴィルヘルムの社会福祉政策に期待して、国と教会と内国伝道のすばらしい協力がはじまると信じた。宮廷説教師は、一年前宮廷から公的な政治的影響力をもつ活動を封じられたあと、新しい社会福祉活動をはじめた。

アドルフ・シュテッカーは卓越した重要人物たち、偉大な国民経済学者アドルフ・ワグナー、定評のある福音主義労働組合の牧師であり指導者であるルートヴィヒ・ワグナー、そして偉大な学者アドルフ・フォン・ハルナックと共に1890年5月28日、「福音主義社会会議」を設立した。ここで社会問題に関するあらゆる方向は、福音主義の精神において、神学者たちと国民経済学者たちとのより広い学問的対話を基礎にして導かれるべきだった。[70]

キリスト教 - 社会福祉の事柄は、ビスマルクの失脚後、最初の厳しい打撃を受けた。皇帝の指示によって1890年11月、シュテッカーは彼の宮廷説教師の職を失った。彼カールスルーエのバーデンでおこなわれた保守党大会で不用意に政治的演説をし、また反ユダヤ的な意見をさりげなく話の中に混ぜた。ベルリンのフリードリヒ大公の苦情はもう一つの処遇を可能にした。ヴィルヘルム2世の致命的な欠陥が露呈した。ベルリンでも政治的な地位を失って不人気になってしまったシュテッカーは、人気をあげるためにためらいもなく解雇された。

教会総会の反響が後に続いた。ミルバッハと福音主義教会総会の議長、フリードリヒ・ヴィルヘルム・バルクハウゼンは、退職した宮廷説教師シュテッカーが、第3回定期教会総会で教会会議の幹部たちの

中から選ばれるのであれば、皇帝の気に入らないことになるというて威嚇した。他にも侮辱が後に続いた。

キリスト教社会主義の関心事から見るとその結果はひどいものだった。ベルリン市民の運動はもう何も起こらなかった。そのかわりに、常に強烈な反教會的・反保守的な態度をとってきた急進的な反ユダヤ主義が頭をもちあげてきた。彼は1893年16人の国会議員と共に、国会に入った。そして、保守党が手綱<sup>たすな</sup>を引くことはもはや出来なくなった。

ヴィルヘルム2世が重要なものとして予告した社会福祉政策への期待は、社会民主主義者たちの執拗な拒絶の姿勢によって水泡に帰した。皇帝は過剰な自己顕示欲のなかで、敏感になり、彼がなす労働者保護法の立法の整備を不満げに見守ってきた保守的な工場主の人たちを一段と駆り立てた。彼の考え方によれば、家のなかで家長が望んでいるだけであって、彼らは労働組合と社会民主党、講壇社会主義と、キリスト教社会主義を非難すべきものとは認めなかった。この経営者の代弁者は、男爵の身分に昇格した有力な資本家の実力者、ザール州の精錬所で労働者の模範的な面倒をみたが本気ではなかったカール・フェルディナンド・フォン・シュトゥム・ハルベルグであった。この階級の人たちは沈黙して先端で皇帝の信頼を獲得した。

シュテッカーの政治的なライフワークの上に破局が襲いかかった。外からの原因がそうさせたのである。彼の政治的同志、ハンマーシュタインは投獄された。シュテッカーは彼の手形偽造と得体の知れない行状については、なにも知らなかった。しかし、彼は疑われるようになり、再び誹謗された。若き皇帝がビスマルクに反感をもつようにと望んだ1888年のいわゆる「火刑の」「まきの山手紙」といわれているシュテッカーの手紙は、社会民主党新聞『前進』に手渡された。フリードリヒスルーにいたシュテッカーが帰ってきて、80歳のビスマルクの誕生日に彼がお祝いを述べたところで、この手紙が公にされ、シュテッカーは偽善者また陰謀家と思われた。(1895)[71]

皇帝は、宮廷説教師の称号を取り消すように言い、教会総会は、すぐに1895年12月16日、牧師の社会的使命に関する最後通達で取り消し、「住民たちの要求に軽率に味方した」ことを非難した。シュテッ

カーを死ぬまで追求した皇帝の致命的な電報が後に続いた。ヴィルヘルム2世は1896年2月28日ビーレフェルトにいた彼の昔の家庭教師、枢密顧問官ヒンツペーターに電報で次のように知らせた。

「シュテッカーは、私が前から言っていたように終わってしまった。政治的な牧師とはばかげたことだ。社会的でもあるキリストとは誰か。キリスト教社会主義とはナンセンスであり、思い上がりと狭量であり、2つのものはキリスト教と直ちに矛盾する。主の牧師たちは隣人愛を養い、共同体の人たちの世話をすべきであって、それと関係のない政治に巻込まれてはならない。」

とぎれとぎれの、フリードリヒ2世時代のスタイルのこの電報は、1896年5月にシュトゥム系新聞『ポスト』誌に皇帝の許可をえて発表された。キリスト教社会主義の事柄は、ドイツ帝国の先端から公然と追放された。ボーデルシュヴィンクはすでに前から次のことを訴えていた。「彼（ヴィルヘルム2世）は、母から非常に大きな権力を相続した。このことは一人の皇帝としては大変重い相続分である」。<sup>[72]</sup> そのうえさらに皇帝は無言のままであった。またその無言が元宮廷説教師を訴訟に巻き込んだ。皇帝は容赦なくシュテッカーを迫害し、死ぬ1年前は、牧師の権利を取上げようとした。

悲劇が起こった。シュテッカーは設立を快く思っていなかったベルリンの女性連盟の幹部から排斥された。ベルリンのフリーデンスキルへ献堂式の際、発言を許されなかった。皇帝夫妻は彼の出席を発言なしの条件で許可した。内国伝道中央委員会だけが、彼の重要性を認め、また独立していた。シュテッカーは捨てられたのではなかった。

皇帝はビーレフェルトの近郊シュパレンベルクで、ボーデルシュヴィンクの施設を視察し、その一年後に、いわゆる「監獄法案」を出すと予告した。その法案はどれも厳しい刑で脅かして「働きたいと思っている同胞の自由な労働をあえてさえぎるものであった。」それはその当時、発展し始めたストライキ規則に反対する挑戦であった。だが、監獄法案は1899年6月の国会で廃案となった。しかしシュテッカーは皇帝が予告してきたようには終わらなかった。シュテッカーの友人のなかで、最も誠実な元州長官のフォン・クライスト・レッツォ

ウは、先頭にたち、シュテッカーの支持者たちと何事にもくじけない人たちのための新しい説教壇と1,200の席をもつ、都市伝道教会、またはシュテッカー教会を建てた。そこで、シュテッカーは彼の死の1年前まで、殆ど毎日曜日、大きな教会共同体の人々に説教した。その中で工場労働者が工場長と並び、女中が貴婦人と並んで座った。無数の若き神学生に正しい説教奉仕の道をしめしてきたグライフスバルトのD. クレーマー教授は、シュテッカーの説教を次のように評した。

「彼は証言できる。彼は祈れる。彼は美辞麗句を並べようとはせず、すべては単純明快である。そして、すべては憐れみであり、すべては活きた泉からわきあがるのであって、器は食べるためのもので飾られる必要はなかった。彼はベルリンで完全な説教が出来る唯一の人である。」

シュテッカーがドイツで説教するところは、どこも、礼拝堂がいっぱいになり、多くの敵がすっかり1人の友に変わった。その後、彼は彼らの仲間となった。そこでシュテッカーは、政治的目的と結びつかない、以前の政治活動は同意されなくなった説教で、何回も勝利した。

彼の説教は1ペニヒで8頁の冊子に印刷された。この配布説教は年毎に版を重ねた。それは大都市の路上で、日曜日のない人たちに、辻馬車の御者に、郵便配達人や工場労働者に配られた。数年もたたないうちに毎週の発行部数は10万に達した。シュプルゲオンとならんで、シュテッカーは彼の存命中に世界の最も大きい教会を彼のキリスト説教によって1つにした。

彼は最後の説教を1906年の聖徒の日におこなった。その時、肉体の衰弱が起こった。その後、4分の1年を平穩に過ごし、1909年2月7日に亡くなった。ベルリンの人たちは、彼を領主のように墓に葬った。

いろいろなことが、シュテッカーを、人間的な、あまりにも人間的な人にした。彼は皇宮の輝きから遠く離れてしまった。彼はすぐに人を信頼するところがあり、しばしば正しい人間洞察にかけるところがあった。彼は結果がどうなるかまったく考えずに反ユダヤ主義的発言をした。またキリスト教社会主義宣伝の中に彼の口調を混ぜることはよくなかった。彼が得た成果は安っぽいものであった。それがやかま

しい大衆の中で論じられなかったとしても、彼が心配していたことは、当然そのとおりになった。

シュテッカーは、ヴィルヘルム2世のもとでいまにもビザンチン様式に変質しそうになって君臨している国教会の弱さを知っており、しかし他方では、シュタルムや、フォン・ゲルラッハが彼を引き合わせたように、キリスト教の特性が保守的・君主的国教会の思考範囲を脱していかなかったことは悲劇的なことであった。シュテッカーはキリスト教国家のこの幻を追いかけるほどナイーブではなかった。

「私は次のような考えを持っていると思われていた。すなわち教会は国民経済法を立法する能力と責任を持っていると。関税、租税、同業組合等の問題を技術的にどうするのか見解を述べるようなことは、私には縁がない。私はそのことについて何も考えていなかった。しかし、私は次のことを支持した。キリスト者のすべての生活領域に、公職にある人のすべての組織に、キリスト教精神が浸透するのでなければならぬ。というのは、人がつくった組織はなんらかの精神によって魂を満たされるものである。あなた方はキリスト教ではなく、非キリスト教のまたは反キリスト教の精神をもっている。キリスト教は政治を正しくし、社会生活を正しく形づくるすべての思想を持っている。」[73]

いずれにしても、シュテッカーは大きな目標をかかげて偉大な行動力、またぬきんでた才能を無条件に投入した。彼の神学的発言は私たちに知らない多くのことを教えた。そうするうちに国家のかたち、社会の再建、政治、国民感情、経済、神学、すべてが変わってしまった。

フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとの彼の変わらぬ友情は、2人の偉大な人物の神学の中に最も深い基礎を示している。すなわち、2人によると「全生涯の活動はキリスト教信仰を終末論的に伝えることができたのである。私たちが働く目標、私たちの民族、私たちの国、世界、そして私たち自身は、このすべてをもっている。しかし、この世においてなす奉仕は、決して終わることのない国の、1人の主に対する、不変の関係を持っている。」[74]

ここには、父ボーデルシュヴィンクがシュテッカーの死後に書いたように、つらいものではなかった彼の闘いの秘密も含まれている。

「私が今私の友をうらやもうとするならば、彼はおそらく恐れを知らない真理の告知者として、特に多くの不正に苦悩する神の闘士であるということについてだろう。」[75]

シュテッカーは保守的、君主制の基礎をもつ「キリスト教国」の思想により有権者のキリスト教運動の助けを得て、「無宗派になった国家」を新たに調整し、また国が支援する真の社会に対する「敵対者のゆるがぬ山」を除こうとした。彼は自由主義者の抵抗、ビスマルクの反対、また国が罪を定める多くの法のように、取り除くことを認めないヴィルヘルム2世の分裂した社会福祉政策の抵抗にあって挫折した。

彼の友人フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、「キリスト教国家」という思想を彼と共有しなかった。彼は、法はその民族の地域にいるすべての人に与えられるもので、彼らは内的・外的故郷を彼らの中に見出し、家庭を築き、労働に打ち込み、生活に責任を持って生きていくことが出来る「憐れみに満ちた」法を持つ国家を望んだ。

そこで2人は互いに歩き回り、イエス・キリストの、共同の十字架の下で互いに負い支えあった。上の教会が彼らにその指示を与えたのではなく、神の召命を受けた人であった。教会の指示は来なかった。彼らは困窮の傷跡を手がかりに、心に燃え上ってくる内的衝動と注意深い意志に押し出されて任務へと向かった。

## 4

キリスト教社会福祉をめぐる人たちの輪、フリードリヒ・ナウマン  
世紀の変わり目 - 福音主義社会福祉協議会福音主義労働運動  
フリードリヒ・ナウマン - カトリックの社会福祉教説

1900年の新年に世紀の変わり目を祝う公式の祝辞で語られたことは、大変楽観主義に満ちたものであった。過ぎ去った世紀は最も誇り高い成果を残し、最も偉大な人類の歴史を刻んだと確信された。その主な内容は、世界列強に対するドイツの精神的な高揚であった。ドイツは古い文化をもつ諸民族を価値あるものにした。数世紀の成果を回想す

ると、自然科学と技術の結合を誇っている。この結合はこれから先も人類の生活水準を上げ、諸民族を向上させ、幸せにし、満ち足りたものにしていく。諸民族の平和的な交流の広がり、互いの世界を統一した親しみあるものとし、ヨーロッパ自身も今まで以上に強い国際共同体として理解されるようになる。

文化的楽道家のこの大合唱と比べると、かすかに聞こえる戒めの声があった。「福音主義ドイツ国民」に語られた内国伝道中央委員会の新年のメッセージは楽観的なものではなかった。「社会運動」の画期的な意味がはっきり表明されるようになった。「労働者階級の入党は、間違いなくキリスト教諸民族世界が集まってなす力より大きなものになり、与える影響は大きく、世紀を隔ててあらわれ、そこから生じる闘争の克服は上り坂の世紀があとに残した厳しい課題であった」。「あらゆる面で大きな負債を負うこと」が忠告となって強調され、これまでの内国伝道の人たちがなしてきたより偉大な人が必要であるという声となった。その時「福音は私達の社会闘争の中に恒久平和をもたらすように、私たちの国民生活を健全にする唯一の治療法である。」[76]

この訴えは教会誌に掲載され、42万5千冊をこえて出版された。それは第1次世界大戦の恐れにおののいた14年の間、いたるところで前面に出てきた中身の無い世紀の変わり目の楽観主義に対して、心地よく突き出ている。

皇帝の揺れ動いてやまない、それはしばしば厳しいものであった社会政策の中で、中央委員会は社会福祉政策の明確な線を堅持することができた。人はこれまでの線にふみとどまり、提案を繰返した。中央委員会の組織の中で、社会の緊急事態と労働者問題についての連載報告がずっと掲載されるようになった。社会問題は会議で根気強く議論された。そしてここで細部が扱われるようになった。しかし、教会全体を呼び覚まし大衆の心を打つような大きな出来事は起こらなかった。

キリスト教国民労働運動は、こころよく受け入れられた。キリスト教労働組合は宗派を超えた基礎に立ち、反マルクス主義の基本的な立場に立つ労働者の利益を代表する職能代表組合として1899年以来続いている。1903年に、キリスト教労働組合、福音主義、またカトリック

の労働者協会、国家公務員労働者連盟、そしてドイツの商業徒弟組合はすでに62万人の労働者と従業員を数えた。キリスト教の世界観と愛国的な心情をもって、ドイツの労働者大会に参加する人たちの総数はすぐに111万2,482名の会員を数えた。

中央委員会は、団体連合会といつでも連絡できる福音主義労働者協会を作り上げた。彼らは同時に「自由教会社会会議」との親密なかかわりをもった。

この会議は、1880年5月28日にアドルフ・シュテッカーとほかの人たちが創立した「福音主義社会会議」でシュテッカーは村八分にされ、その後、2つの議長の役を奪われて、そこを離れたのであるが、そのような分裂が起こった。

新しい「自由教会社会会議」は、1897年4月27日にカッセルで第1回の召集をし、福音伝道運動と社会改革運動、特にA. クレーマーやアドルフ・シュラッター、マルティン・フォン・ナトゥージュウス、W. リュットゲルト等々の聖書主義グループの神学者たちが参加した。ここで例えば、国民教会と福音伝道、家内労働者婦人会、福音主義労働者協会、そしてキリスト教労働組合、堅信礼の改革等のように、とりわけ現実的な教会の問題が話題になった。

アドルフ・フォン・ハルナックが指導した福音主義社会会議の活動は、社会的倫理的問題を理論的に討議し、明確にすることに反対し、それにかわって農業労働者問題と女性問題を取り扱った。

この福音主義社会会議は、新世紀初頭に大きな2つの労働者のストライキを起し、全キリスト教的社会的な仲間たちを深いところで呼び覚ました。「ザクセンのクリミトシャウ紡績労働者ストライキ」(1903/04)は、1日10時間(労働)のために闘うようになった。1905年の20万人の労働者が行ったルール人のストライキは1日8時間の労働時間短縮のために闘った。2回のストライキは労働者たちに直接の成果をもたらさなかった。

だが、問題は、教会の前にも、またキリスト教社会党の前にも、どちらの側にもつきつけられたかのようであった。クリミトシャウでは、牧師はみんなその地の工場主の側についていた。いったい「超党派」と



いう「牧師の中立」ということがどこにあるだろうか？労働運動が根本問題を訴えているのに、教会内部はちっともはっきりしなかった！

ルール地方の労働者ストライキの際、福音主義社会会議の活動委員会は困窮を緩和する救援物資を準備して参加した。これは、社会問題について、それが全く大事な問題であった時に、中央委員会がなした告知がすべて無視された全体的な不確かさの中で、希望の光であった。

ハノーバーにおける「ルール地方の労働者ストライキの直後に開かれた福音主義社会会議は次のことを満場一致で確認した。即ち、労働者の組織は「私たちの経済のために必要不可欠のものであって、私たちの文化にとっても意味深いこと」である。[77] というのは、2つのストライキ運動の積極的成果は、自由労働組合とキリスト教労働組合の会員数の増加が反映されている。とりわけ、南ドイツでは増大する社会民主主義は自由キリスト教労働組合の展開を目の当たりにして、オーソドックスなマルクス主義の鎖から解放するだろうという、必要以上の期待があった。南ドイツの諸国では1,900近い民主主義的な選挙改革が実現した。首尾一貫した社会民主主義が国の財政計画に認められた。変化が始まるかと思われた。

指導的国家プロイセンだけが3級選挙法によって議会の連帯責任を完全に遠ざけ、広範な大衆をしっかりと守った。ヴィルヘルム2世は、社会主義工業労働者がこの国を楽しい国とし、その後、目を覚まし、この国を自分の国であると気づかせる機会を完全に逃してしまった。

第1次世界大戦前に内国伝道が共に取り組んだ最後の活動はペーテルの福音主義社会学校であった。

団体連合会の指導者ルートヴィヒ・ヴェーバーは労働者階級から福音主義労働組合の事務官のような労働者協会の将来の指導者を養成する福音主義労働組合をつくった。福音主義労働運動は政治にあとあとまで影響を及ぼすことはなかった。1912年の国会に、110人の社会民主党国会議員とキリスト教社会党員が3人だけいた。

この経験は、内国伝道の若き神学者たちの中で最も自立的で最も天才的な人フリードリヒ・ナウマンをついに政治の中につれてきた。1860年5月28日牧師の子、フリードリヒ・ナウマンはライプツィヒ近

郊のシュトルムタールで生まれた。ラウエスハウスにおけるヴィヘルンの活動は、若き神学者を強くひきつけた。彼は1883年そこに助手の長として入った。彼はここで社会教育の力がわかるようになった。1880年にツピカウの近郊ラーゲンベルクにおける彼の最初のザクセン人の牧師職を受け継いだ時、人を導く彼の偉大な才能が直ちに姿をあらわした。死んだ教区がよみがえった。牧会的また国民伝道の責任感が彼を以前のシュテッカーのように社会福祉の中に導いた。工場労働者と直接に出会って、彼は最初の意義深い著書『労働者のための教理問答か真の社会主義か』を著した。彼は情熱においては、ベルリンの宮廷説教師に似ていた。

「ここで何千人もの人たちが、一晚遊んで、だらしのない女たちに浪費している、他方、縫い子たちは時給8ペニヒのために疲れた目をし、やつれた白い指で、夜の2時まで働かなければならない。その限り経済的公平を求める叫びは鳴りやまない。民の中で行われている公共の売春を禁止するために労しなければならぬ。あなたはパンを求めて叫ぶ人たちの口を閉ざそうとするのか？あなたがたは金持ちの門の前にいるラザロに命じて、金持ちがいつももすばらしく、友の中で生きてよいのだと気づかせないだろうか？」<sup>[78]</sup>

彼は、1891年9月、フランクフルト・アム・マインに内国伝道協会の牧師として招聘され、シュテッカーと同じくらい人を魅了する才能を評価され、偉大な雄弁と文筆の才能を示した。シュテッカーと並んで彼は福音主義社会党会議を指導した。1891年彼はフランクフルトに福音主義労働者協会をつくり、その内部でたちまち指導的地位についた。ナウマンは社会民主主義が「福音主義教会の最初の偉大な異端」であることを発見した。それは彼にとって、「社会民主主義は終点をキリスト教社会主義に置く、その通過点としてのみ」であった。

天才的なナウマンはキリスト教社会主義の使者から、キリスト教に基づく国家社会主義の使者へと成長した。キリスト教社会主義の牧師にとって「政治的牧師とはばかげている」という意味のない皇帝の発言は、真に効き目をあらわした。国家社会主義政治家に変わったキリスト教社会主義者の牧師ナウマンは、1907年に国会で左翼自由主義者

の国会議員となった。しかし、100万人の社会民主党の選ばれた労働者は、いつまでも彼が宣伝する目標にとどまった。彼の目標は社会主義国家であった。内国伝道はの中で沈黙して解消した。社会主義国家はすべての福祉課題を引き受け、またここで社会福祉の思想を守った。

社会的関心を持つキリスト教は、社会民主主義を唯物論から引き離すことに成功しなかった、そこでナウマンは労働者が真の国民的国家思想の仲間になることを望んだ。この方法で彼は彼らを否認から導こうとした。彼は彼自身の戦いと活動の時代の30歳台という男盛りの時に、進歩的人物であると同時にヴィルヘルム時代の囚人という一つの倫理的キリスト教の基本にとどまり続けた。

「今日、多くのキリスト教徒は彼らの理想を過去の日々に持っている。このことは重大な、しかし残念ながら本当のことである。私が教会におけるロマン主義と呼びたいものは、古い時代の観念に帰っていく。あなた方がカール・マルクスを無視するのであれば、あなた方の目を閉じよ！と若者たちに大声で訴える、その人は正しく愛する人を教育できるが、私たちの目前に迫った闘いのために、十分に厳しくしてはいない。私たちは最後には誰を得ようとしているのか？今はすでに社会民主主義者であるかあるいは明日にはなるだろうまさにこの民である。私たちが、ちょうどその時、この国民とその新聞、冊子、集会を私たち自身が体験していないならば、私たちはどのようにして知り得るだろうか。」フリードリヒ・ナウマン[80]

フリードリヒ・ナウマンは、労働者の世界がこの国で成長し彼らが生きながらえていくような古い君主制を、社会主義の精神で満たそうと思った。彼らが彼ら自身の弱さに陥った時、彼は新しいワイマール共和国が、労働者階級との活気に満ちた協力関係の中でよい将来を築いていく社会主義的愛国的、そして民主的な市民階級のために、真の故郷を用意しようと思った。

だが彼はベルリンのドイツ民主党第1回党大会で党の役員に選ばれたばかりの1919年8月24日、60歳で亡くなった。彼の精神を「彼の弟子テオドーア・ホイスは連邦大統領であった10年間にドイツの歴史の中に受け継いだ。」[79]

内国伝道の人たちがヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの線の中でフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクとアドルフ・シュテッカーを越えて、キリスト教社会主義が関心事と課題を彼らの民に委ねたものが、フリードリヒ・ナウマンと言う人物の中に余韻を残している。彼は彼らと共に外面的な成功に欠けているところを補った。ドイツ社会の発展途上で直接証明できる影響を容易に読み取ることにはできない。しかし、フリードリヒ・ナウマンはこの先任者たちのようにあらゆる方面の数え切れない人たちと生きた実り豊かな関係を作り上げることができた。ナウマンは、彼の何ものにも左右されない誠実さ、それが福音主義的な気風から生まれたもっと大きな友人と弟子たちのグループをつくっていった。

ベルリン東部の労働者の宿泊所に、イギリスを手本にして1911年、社会福祉共同事業体を創設したジークムント・シュルツェ牧師の勇敢な働きも忘れられてはならない。彼はかつて労働者の純粋に人間的な信頼を得ようと試みたことがある。すべての学部出身の若き協力者は労働者住宅に住み、青年労働者を会館に、大人を話し合いの夕べ、母の夕べに、また民衆教育活動に集めた。

都市伝道の意味での福音的活動は断念された。この活動は党の政策上は中立的で宗教的には超教派的なものにとどまった。だが、それと同時に、彼らの社会的義務についての教会の市民階級の良心を深めるために、キリスト教慈善の倫理観を吹き込み、また疎外された国民階層の間に新しい道を切り開こうとした。

カトリックの側のキリスト教社会主義も同様に、プロテスタントが労働者問題に関する取り組みで得た以上に先に進んだ認識を得ることはなかった。好戦的なマインツの監督ケッターと教皇レオ13世はそれほど新しい道を進まなかった。というよりカトリックの基本的考えの内部にとどまり、カリタスの提案を超えていくことはなかった。カトリックの側でも同じように総大司教が福祉を開設して社会的傷を治そうとし、また非常に後になって新しい権利をもつ労働者を助けなければならなかったことを初めて知ったのである。ここでより早く、即ちビスマルクがカトリック教会を巻き込んだ文化闘争の時代にキリス

ト教社会党、女性労働者協会の創設を始めた。彼らははじめてカトリックの中央党の中でどうか先に進み、目が開かれていった。

カトリックとプロテスタントの間で、社会問題に対する教説が異なっていることは、よくなかった。「キリスト教社会主義」のカトリックの特徴はまったく教会法と自然法の中にあった。「キリスト教社会主義」の福音主義的特長は、労働者に人間の尊厳と人間にふさわしい生活条件を闘いとり、救われたキリスト者は個々の慈善を行使する責任をもっていることにあった。

同様に1891年5月15日の教皇の新しい回勅[*die p 舊 stliche Enzyklika Rerum novarum*]は、1864年のマインツの監督ケツラーの「労働者問題とキリスト教」についての文書のようには何も新しい道を示してはいなかった。「また彼らは労働者にカリタスの救援物資で助けるのではなく、労働者の新しい権利と労働条件をもって援助すべきである、という核心をとらえてはいなかった。」

だが教皇レオ13世は社会問題の変わっていく重要性を認識し、ローマの世界教会にそのことを警告しようとした。このことがどの程度成功しているのか、または成功していないのか、論じることを、私たちはためらうものではない。プロテスタント世界の優位ははっきりしているわけではない。

カトリックの社会改革者と福音主義[社会改革者]が一致したことは、実際に健全な社会秩序はキリスト教の力によるしかないと断言するにしても、とにかく、反キリストの前兆が現われないようにすることができるという共通の確信をもっていることである。

レオ13世は教会の指導の下で、国と社会について、労働者と雇用者について、また労働者福祉と労働者自助について、共同作業をし、真のカトリックの意味において正しく調和する福祉理解を求めた。

19世紀とヴィルヘルム2世時代におけるプロテスタントの社会福祉理解は「神の助けと自助、国の援助と、兄弟の助け」を個々のキリスト教徒の人たちの全く個人的な責任を基本にしてなすように布告した。カトリックの社会改革者たちが彼らの教会について考えた以上に内国伝道の人たちが控えめに考えた福音主義教会の社会福祉的誠実さはそ

の時人的に成長していく良心の回路にあった。

## 5

第1次世界大戦にいたるまでの内国伝道の発展  
福祉活動 - 単独事業 - ドイツディアコニー制度の歴史と意味  
社会福祉学校と福音主義女性救援 - 公共福祉

帝国における内国伝道の更なる発展をたどると、仕事の重点は要求の変化に応じて施設を整備し、改築を受け継ぐディアコニー福祉の活動分野にあった。<sup>[81]</sup> 世界列強へと向かう第2帝国の成長と展開と結びつく新しい活動分野も掘り起されていった。福音主義女性の活動分野となった鉄道ミッションが設立された。「福音主義ドイツ鉄道ミッション連盟」は、1916年に275の鉄道ミッションを結成した。ここでは、とりわけ独身女性、母、娘、そして子供たちの支援を行うようになった。中央委員会は船員伝道の必要性を繰り返し語ってきた。1893年、約16万人の福音主義の船員たちに対するこの活動は、ドイツ内国伝道協会を再認識させることになった。ベルリン都市伝道はシュテッカーの指導のもとで、1900年「河川と運河の船員のための教会の福祉協会」を創立した。1904年ベルリンで、一つのはしげが、日曜礼拝のために使われる「海上教会」のために、つくりかえられた。その主な停泊地は、ベルリン西港であった。彼らはそこからそれぞれのベルリンの港に曳航されていった。その中で若い船員のカップルが結婚式をした。船員の子どもたちの家が生まれた。そこで船員の子どもたちは学齢期を通して教育を受け、また学校の授業と並んで船員伝道者によって宗教の授業と堅信礼準備授業が始まった。<sup>[82]</sup>

日曜日の休みがないドイツのホテル従業員へのウェイター伝道は外国で成長した。それは、1888年以来、ロンドンのドイツ人キリスト教青年会によって、ジュネーブのドイツ人ルター教会のアドルフ・ホフマン牧師によって、300人足らずのドイツ人ウェイターが働いている(1890年)ベルリン都市伝道の早くからの協力者が3つの所から始まっ

た。だが、最初は、カンヌのドイツ福音主義教会が、フランスのリビエラで1872-1908年から指導したヘルマン・フリードリヒ・シュミット牧師が彼の小さな本『ウェイターの幸せと悲しみ』(1891)を出版し、ウェイター伝道の共通の関心と呼び覚ました。イギリス、フランス、そしてスイスは、向上心をもつウェイターのために、以前から高等教育をしてきた。そしてロンドン、ジュネーブまたカンヌは、ドイツ人の地域に広がった海外ウェイター伝道の海外センターとなった。[83]

ヴィヘルンが1850年にアントワープではじめた船員伝道も同様にドイツ海戦の拡大と共に拡充された。中央委員会はそれをイギリス、スウェーデン、オランダ、イタリアの港でもできるようにした。ついに第1次世界大戦勃発前に200の港を受け持った。[83\*]

キリスト教ホスピスは「簡易宿泊所」の補充として、1860年よりドイツのいくつかの地方に生まれた。こうした働きが時の連合の流れに従って、彼らは1904年以来、ついには200以上のホスピスとちょうど1万2千のベッドをもつ1,939の保養所が所属する独立した連合をつくった。内国伝道のキリスト教ホスピスの思想は、たちまちドイツ以外の国にも、とりわけスイスにまたスカンジナビアの方へ広まった。

1898年以来中央委員会にメンバーとして所属していたベルリンの神学教授ラインホルト・ゼーベルグ指導のもと、20世紀の初頭より中央委員会の護教的講演が実施された。毎年講演では、信徒と神学者が内国伝道の全体の課題を担当した。この課題はすべての国と県の協会を組織していった。急進的な自然主義を説き、裸の自然への回帰、未開への、この世への回帰を語るニーチェ哲学が若者を捕らえてかく語った。「私はあなた方に誓う。私の兄弟たちよ、大地にとどまれ、そしてこの世を超えた希望についてあなた方に語ることを信じるな」。

懐疑主義は教養人たちを脅かし、つまらない現世の見解やヘッケルの世界の謎、ダーウィンの「存在のための闘争」、新しい権力神話は、敬神の念を空洞化しようとして、まだ教会にいる大衆を幻惑した。

社会民主党からだけでなく、自由主義と進歩党に夢中になっている、もっと多くの市民階級の人たちから内国伝道に対する社会の告発がないわけではなかった。ここで中央委員会がしようとした説明と弁明は

進まなかった。

1901年4月1日に発効した新プロイセンの「未成年者福祉教育法」の中で、ついに内国伝道の希望はより考慮されるようになった。深く根を張った刑罰と拘束の観念は、今や教育思想によって有効に制限され、もしくは解除されるようになった。内国伝道はそのために3世代前から努力をしてきた。刑事裁判官の仲間においても、同様に、新秩序は大衆の中に開かれていった。

その頃、青少年運動が始まった。両親の家の問題と学校問題は、熱中した討論の重要な場面に移った。青年期にいる人は不健全で青年らしくない生活様式に反対し、また多くの死んだ知識の足かせを無理につけようとする学校制度に反抗した。人は青少年期固有の権利を認めてこなかった19世紀の全く功利的な考え方に対して抗議した。この時は窮屈な通過の段階、大人になる準備の時としてのみ見られていた。あらゆる種類の学校で、一般に少年も少女も一緒にするような型にはまった教育法によって授業が行われた。今日では、青春時代はその意味をもち、またその特別な意味内容に感激することも知られている。一生の中で14歳から18歳の青少年たちは、教育的な意味においても固有の権利を闘いとった。[83\*\*]

この変化は少年刑法に影響を及ぼした。教育困難な古い救済施設事業の従来への担い手たちは、彼らの教育活動の中で、新しい意識をもつように呼びかけられた。ここで、青年に教育扶助をなすため、ディアコニー奉仕団が取り組むようになった新しい重要な課題が生まれた。兄弟の家は世紀の変わり目に向かって、力強く発展していった。

兄弟の家の発展を観察すれば、「弱い苗木から大木が生まれた」と言えるだろう。多くの兄弟の家が、すでにすべての地区にあった。1833年のラウエスハウスや1844年のドウィスブルクのフリードナーの施設のように、昔につくられたものは、新しくされた。1850年に創立されたグライフスバルト近郊のツュッソウのツリコウ、1850年ナインステット、1858年ベルリンのヨハネ・シュティフト、1869年ハノーハーのシュテファンシュティフト、1872年モリツブルク、1876年カールスヘーエ、1877年ナザレ - ベーテル、1881年マルティンショフ - ローテ



ンブルク - クラシュニッツ、1883-1945年カールスホフ(東プロイセン)、1890年ラムメルスブルク、1893年ノイエンデッテルスアウ、1896年レームシャイト - リュットリングハウゼンのタンネンホーフ、1901年トライザのヘファータ、1906年ノイミュンスター近郊のリクリング、1907年フォルマルシュタイン - ルールのマルチネウム、ドイツディアコニー協会連盟(DGD)、1909年に作られたマールブルクの兄弟の家タボル、1920年のファルケンブルクのルターシュティフト、1932年バートクロイツナッハのパウリネウム、1949年バートオェインハウゼン、ヴィッテ子ども家、1954年アイゼナッハのヨハネス - ファルクの家、これらが新しく作りかえられた。

それぞれの特性はここに豊かにあらわれている。その地域の伝統の中に埋もれていた特性は、たびたびしっかり教育された仲間によって継承され、教育思想はそれぞれの兄弟の家で、さまざまに形成された。また兄弟の家の管理責任者たちは1904年以来、中央委員会の指示にしたがって、新しくなった会議に新しい問題提起をもって集まってきた。男のディアコニーの出勤は、いつも活動の分野をひろげた。ディアコーンたちは、共同体助手、青年部書記として、合唱団指揮者として活動し、また共同体牧師職と教会グループの管理センターで、今も同じように内国伝道だけでなく、直接に教会の奉仕の中でも活動した。彼らは連帯責任と自己責任をたえず広げていく活動領域の中で、指導的立場に招かれ、直接に広い社会活動の領域で働くようになった。彼らの準備教育で、その列から明らかになって出てくる要求は膨大なものになった。即興でやる時代は終わった。

一般に、教会の代表者の前でディアコーンの試験を受けて終了する、5年間の念入りな理論的実践的職業教育が、行われた。あとで職業につく上でこの科学的実践的な職業教育は非常に多面的で役に立った。授業も同様に古典語で、少なくとも新約聖書を原語で読めるようにギリシア語ができるようにした。いくつかの学校では、ディアコーン試験に宗教教師試験を加えた。パイプオルガン演奏者試験、福祉士試験、看護師試験、精神病看護師試験、経営管理士の試験も受けることができた。さらに加えて、特別な職業教育も必要とされた。

内国伝道と教会の内部に新しい職能階級が形成された。およそ50種の特別職が教会とミッションと国の領域で、ディアコーンを送り出した。専門分野の課題は、はじめのうちはかなりの程度までディアコーン職の活動によって形成された。その際、ディアコーンは今もなお、次の3つの主なグループからなっている。即ち、教会共同体ディアコーン、援護ディアコーン、そして管理部門のディアコーンのグループである。だが、ディアコーンの側から、本来の使命である「言葉と行いによる福音宣教」はいつも強調されてしっかり保たれた。それと同時に、才能と賜物の多様性は活動の創造性豊かな分野のためにとっておかれた。1913年以来、ディアコーンたちは自分たちの委員長を彼ら自身の系列から選び、「ドイツディアコニー奉仕団」の中に統合した。

中央委員会はディアコーンたちの社会的、経済的地位を高め、最低賃金を定め、安心できる結婚と俸給制度の大巾な統一をはかった。

そこでドイツ福音主義キリスト教界の内部に自立した新しい職業階層領域が生まれた。ドイツのディアコニー奉仕団は第2次世界大戦後(1962)6千人のディアコーンのおよそ42%弱を飛躍的に増加させた。それは牧師不足を補うだけでなく、それぞれの国教会で要望が起きている「遅れて職に就く」ディアコーンたちに、牧師職の奉仕の中に認証されたディアコーンを引き受ける、ちょうどよい経験となった。

彼が第1次世界大戦前に「男性のディアコニーの将来は総じて内国伝道の将来を意味している」と言った時、内国伝道中央委員会はディアコーンのこの経験を予測していた。男性ディアコニーとディアコーン職の歴史は、その意味で近代の教会史の編纂が待たれている。[83\*\*\*]

他方、それぞれの事業が開始された。俗悪な出版物に対する、反道徳的言動と飲酒癖に対する闘いが、科学、芸術そして文学分野の人たちから繰り返し妨害されるようになったが、そのような人たちに期待する者はなかった。ここから内国伝道は、低俗な出版物によるドイツ文学の外国の過度な影響に反対し、1906年「福音主義書籍出版連盟」の中にしっかり結びついた重要な歴史を指摘することができる福音主義出版業と緊密に協力した。[84]

アルコール中毒救援活動においては、イギリスからの刺激を受けて

スイス人牧師口ハットが1877年にすでにアルコール中毒救援協会を創立した。1883年青十字節制協会という名前で最初の協会が生まれた。ドイツでは青十字思想を広めるために口ハット牧師とボヴェー牧師とりわけクノーベルスドルフの陸軍中佐クルトが活躍した。この課題はすぐに内国伝道にも受け継がれた。

この協会の会員たちは、協会の同意をえるために、信仰を告白したアルコール中毒患者の心をとらえようとした。アルコール中毒患者は青十字の会委員も自発的に引き受けた厳しい禁酒を、署名して約束した。中毒患者たちは中毒を克服するために信仰の仲間たちにやめることを約束し、それぞれが心から支援した。

救援活動に、初めは互いに活動し、後で他の酒ざらい団体に戻っていけるように、さまざまな連盟が出来た。

ヴッパータール - バルメンにある教会の中立的な「青十字中央協会」、「福音主義教会青十字会ドイツ連盟」、また福音主義改革運動内部の「クナダウェル青十字会」もそう見なければならぬ。内国伝道中央委員会は青少年保護のために飲食業法をつくって大きな功績をあげた。ここで政府、省庁、国会問題はよく話し合い、また闘われた。[85]

しっかり組織されたドイツ人、とりわけ南アメリカに行く女子売買人たちを、重い懲役刑で脅かしてやめさせようとした、恥ずべき女子売買に対する闘いは、最後には「女子売買と闘うドイツ国民会議」に統合された。プレーメンのクンツ牧師は、国際的共同事業を目指し船員伝道を予防活動の中に引継いだ人である。道徳に反すること、売春、また飲酒癖に対する闘いは、更にすすめられ救援活動を拡充した。

中央委員会は、女性大刑務所の女囚のために、ついに女性刑務所看守を雇用するという斬新な方法をとった。1891年刑務所業務での女性監視人を養成するところまでいった。女囚のための、こうした努力をして、釈放された女囚のためにすでに100を超える救援協会が出来たが、これらは1892年には「ドイツ釈放囚人保護協会」に合併された。

身体障害者福祉は、シュテッカーが1879年ノヴァヴェスにあるオペリンハウスを指導し、今はポツダム - バベルスベルクに任命された牧師テーオドーア・ホッペ(1846-1934)に1人の先駆者を見る。ここでは

んの数年後に世界の目をひきつけた事業が始まった。ドイツだけでなく、日本に至るまで全世界に模倣となった。ホッペ牧師は、身体障害者が社会で生活する力をもち、役に立つ一員となるように教育し、それと共に第1次、第2次世界大戦中に意外と重要な道を開いた。

彼はスウェーデンを手本として1906年にドイツノヴァヴェスろうあ盲ホームをつくった。そこで終わりのない愛と忍耐の奉仕はいいようなない困窮に、人間らしい生活の中で、今日までずっとかぎをかけていたと思われる門を開いた。[85\*]

婦人問題領域も同じように内国伝道によって福音主義教会の中で再び新しい流れに出会った。フリードナーは、女性ディアコニーと共に、未婚の女性が刑務所、病院、老人、子どもと、そして教会共同体の中での奉仕において創意に富む作業方法を考え出した。そうこうするうちに、市民とプロレタリアートの女性運動は、それぞれが目標をもつようになった。教会は、毎日繰返される生活において、男女同権というような、責任ある自立した協力関係を求める女性のブルジョワ的世界を、根本的に時代遅れの世界と見ていた。労働者階級の女性運動においては、教会は苦笑しながら観察するようなことはしなくなり、目的を心得た闘いをするようになった。

内国伝道の人たちは世紀の変わり目を間近にして、再び精力的に教会における女性問題と少女問題に取り組んできた。ベルリンのエリーザベト教会の牧師ヨハネス・ブルックハルトは1848年から、内国伝道運動の成果として始められたベルリン女性協会を、1890年理事会をもつ一つの連盟に統合した。これは1893年ドイツ福音主義女子青年連盟を創設するシグナルであった。ベルリン-ダーレムにブルックハルトハウスが生まれた。まもなく、18万5千人の会員をもつ6万5千の協会が合併した。ここですべての階層の、少女たちの差し迫った問題は、社会的救済に至るまで福音主義精神の中で取り扱われるようになった。ブルックハルトは教会内のすべての偏見に逆らい、責任をもって指導する女性職員を養成する勇気をもっていた。巡回する女性書記が国中を旅し、教師講座と聖書講座を実施するようになり、余暇を調整し、女性労働者の職業教育をほどこした。浮上する青少年運動の嵐の中で、

このキリスト教の女子青年たちは、それぞれ固有の顔と使命感をもった。やがてそのことについての青少年文学の時代が始まった。

1899年、ルードヴィヒ・ヴェーバーなどの内国伝道の指導的人物は「ドイツ福音主義女子青年連合」の中に、すべての国民階層の青年女性連合と女性協会と青少年協会を集め、ドイツ民族の宗教的・道徳的再生のために、女性問題と女性世界の社会改革にとりかかった。ここでおよそ25万人の福音主義の女性がネットワークで結ばれた協会の中に集められた。地区協会の実践的活動は、内国伝道と地方自治体が行う福祉活動のすべての地域で始まった。それは社会生活の中で連帯責任へと向かう福音主義女性にとって力に満ちた出発であった。

女性世界のこの全般的な出発によって、アドルフ・シュテッカーは1904年ベルリンでベルタ・フォン・デア・シュレンブルク伯爵夫人とどんなこともできた、チャペル協会の協力を受けて内国伝道の女子職業教育の最初の教育課程を開設することもできた。成長する巨大都市ベルリンでは福祉と教会教育の課題のために、ここで教育された新しい女子職員が必要とされた。1909年、中央委員会の協力の下に、ベルリンで「内国伝道女学校」が始まった。ドイツ福音主義女性連盟はすでに1905年にハノーバーで「キリスト教福祉女学校」を始めていた。

質実な女性、ベルタ・フォン・デア・シュレンブルク伯爵夫人は、彼女を尊敬し愛する少女たちに強い影響を及ぼした。彼女は、中央委員会75年祭において、ヴィッテンベルク城教会で神学の名誉博士号を受けた最初の女性となった。

内国伝道職業女性連盟から福音主義女性福祉連盟と内国伝道シュヴェスターが生まれた。中央委員会は彼女たちのために、コーリン城の近くマルク・ブランデンブルクに、余暇と講習のための住居を取得した。コーリンの修道院跡でシュヴェスターの堅信礼が行われるようになった。

社会福祉女学校から社会福祉学校が生まれ、社会福祉にたずさわる人の学校とも呼ばれた。ここで女性福祉担当職員だけでなく、内国伝道の業務分野と政府の男性福祉担当職員が、健康担当職員と青少年担当職員とそして福祉事務所職員が、公共職業安定所で、家庭教育の中

で、病院看護、工場労働者福祉、そして保養福祉で、女性警官の勤務についても、同じように、準備をするようになった。

福音主義幼稚園女性教師、女性保母、青少年女性指導者は、1925年に彼女達の最初の連盟をつくった。[85\*\*]

女性たちが福音主義教会における奉仕をはじめた時、アウグステ・ヴィクトリア皇后の提案によって1899年に「福音主義教会女性救援」がつくられ、「福音主義女性救援」団体連盟も創設された。ここでこの女性協会は牧師職に関する課題をとりあげるために5千の協会に60万人の会員が属する全教会共同体として生まれた。彼女たち教会の女性たちを集め、共同体での奉仕教育をし、教会についての理解と社会における使命を教えて励ました。これらの女性援護から自立したシュヴェスター連盟が成長した。教育課程と余暇が設けられ、海外にいるドイツ福音主義共同体に奉仕をするディアコニッセ母の家をつくった。

青年運動の問題は一度だけ、「高等学校生徒のバイブルクラス」が1909年に内国伝道中央委員会に加盟した時、内国伝道の門をたたいたことがあった。1883年、エルベルフェルダーギムナジウムの最初のバイブルクラスから生まれた聖書運動は、第1次世界大戦前の最後の年には300の地域で1,000の高等学校に成長していた。[85\*\*\*]

内国伝道は、1911年につくられた「キリスト教を社会伝道ドイツ福音主義国民連合」以来再び進められた。それらはシュテッカーによって創設された「教会社会主義会議」の提案によるものだった。

新しい国民連合は「その積極的なキリスト教の生命力がとりわけ国民の社会生活のためにも達成し効果をもたらす、一つの結合体になろうとした。」「[86] 第1次世界大戦勃発にいたるまでの数年、この国民連合はまっすぐ発展しなかった。中央委員会出版委員会から1910年に「ドイツ福音主義出版連合」が生まれ、「私達はその可能性を持っているに違いない。また新聞雑誌で社会生活の日常問題をキリスト教道徳の世界観に照らして解明する」と、その必要性を説明した。[87]

ザクセン州の福音主義 - 社会福祉出版連合(1891)やヴェストファーレン州に(1907)創設された地方出版連合の上部組織は、ヴェルテンベルクの人(1887-1945)で、マスコミの中心地となったアウグスト・ヒン

デラーの指導を受けて成長した。ヒンデラーは、何が成功できなかったのかというキリスト教全体の型にはまった思考で新聞雑誌をつくらうとはしなかった。あまり影響力のない「福音主義」日刊新聞を育てようとしなかった。新聞の中味にますます道徳が失われていくこと、奔放な行き過ぎを克服すること、問題から一定の福音主義奉仕が世論形成の担い手になっていくことが、問題であった。発展の歩みは出版連盟のこの活動目標の正しさを認めた。[88]

また、膨大なキリスト教雑誌と日曜新聞の教会出版事業が発展した。この関連で福音主義図書館の設立ももっと大きな重要性をもった。ヴィヘルンはすでにその必要性を語っていた。ここで、福音主義の著作と作者に磨きをかけ、教会共同体への入り口を見つけるべきであった。最初の福音主義図書館の中央機関は、1900年ベルリンに「キリスト教定期刊行物協会」を「国民図書館設立中央協会」の中につくった。ここから3年後に内国伝道中央委員会が受け継ぎ、「ドイツ福音主義出版連盟」の一員となった「福音主義図書館連盟」が発展した。「エッカルト」の評論雑誌の創刊、モデル図書館の設置、そして相談所は意味深いものであった。この努力の終わりは10年後に、ゲッティンゲンで教会図書館員が職業教育をうける福音主義図書館学校が設立された。

内国伝道奉仕の多様性と豊富さは、第1次世界大戦の勃発前に、その中で中央委員会がさらに細かく分れている37の専門分野の連合となっていた。内国伝道の種々の施設と組織は、しばしば憐れみ深い町と村の全体を意味した。福祉事業は、老人、病人、長患いの人、心の病、身体障害、盲人、ろう者、アルコール中毒患者、非行少年、子どもと孤児、ディアコーンの家とディアコニッセの家、キリスト教ホスピス、簡易宿泊所、労働者コロニー、保養所、故郷をなくした人の避難所、船員集会所、聖書学校、余暇施設、少年の家、幼稚園、数え切れないほどの豊富な施設があった。これらの奉仕の中に内国伝道の多くの職業活動家と数え切れないボランティアの協力者がいた。ここで苦しみと孤独の大きな流れが秘かによき避難所に合流し、苦しみと罪責の世界の中でキリストの証をたてるようになった。